

東南アジア史学会会報

1994年5月

第60号

目 次

新会長挨拶	吉川利治 (1)
中村孝志先生追悼	吉川利治 (2)
第15期会長選出経過報告	(3)
1993年度秋期会員総会摘要	(3)
第14期第4回委員会摘要	(4)
1993年度会計決算報告(案)	(5)

第50回研究大会報告

第50回大会記念特別講演要旨

歴史として見る東南アジアと日本	山本達郎 (8)
自由研究発表要旨	
19世紀中期コンバウン朝ビルマの行政改革	ミン・ニョウ (9)
国家をもてなす伝統 — インドネシア、南バンテンの カスプハン Kasepuhan とポリティ	渡辺 敦 (10)
タイの社会階層と教育	船津鶴代 (11)
BC2000年紀前半 — 東南アジア大陸における一つの画期	西村昌也 (12)

特別講演要旨

Thai Study in Thailand: A Reconsideration	Pornpen Hantrakool (12)
シンポジウム<東南アジア史における先住民と移住民>報告要旨	
趣旨説明	玉置泰明 (13)
ヨーロッパ人とインディアス	生田 滋 (13)
マレーシアにおける先住民概念	富沢寿男 (14)
東南アジアにおけるジャワ移民	染谷臣道 (15)
共生の構図 — ブギス・マカッサル人の移住・交易活動から	伊藤 真 (16)
タイ族の移住と先住民 — 「先住民／移住民」から 「山地民／平地民」へ	馬場雄司 (16)

資料・研究短報

国際アジア歴史学者会議 (IAHA) 東京大会について	寺田勇文 (17)
バジャウ研究の動向	赤嶺 淳 (18)
バンテン遺跡出土陶磁片共同調査の新資料	坂井 隆 (20)
ベトナムにおける歴史資料の状況について	嶋尾 稔 (22)
地区例会・研究会活動状況	(24)
新入会員・住所変更・事務局からのお願いなど	(26)

東南アジア史学会会報

1994年5月

第60号

目 次

新会長挨拶	吉川利治 (1)
中村孝志先生追悼	吉川利治 (2)
第15期会長選出経過報告	(3)
1993年度秋期会員総会摘要	(3)
第14期第4回委員会摘要	(4)
1993年度会計決算報告(案)	(5)

第50回研究大会報告

第50回大会記念特別講演要旨

歴史として見る東南アジアと日本	山本達郎 (8)
自由研究発表要旨	
19世紀中期コンバウン朝ビルマの行政改革	ミン・ニョウ (9)
国家をもてなす伝統 — インドネシア、南バンテンの カスプハン Kasepuhan とポリティ	渡辺 敦 (10)
タイの社会階層と教育	船津鶴代 (11)
BC2000年紀前半 — 東南アジア大陸における一つの画期	西村昌也 (12)

特別講演要旨

Thai Study in Thailand: A Reconsideration	Pornpen Hantrakool (12)
シンポジウム<東南アジア史における先住民と移住民>報告要旨	
趣旨説明	玉置泰明 (13)
ヨーロッパ人とインディアス	生田 滋 (13)
マレーシアにおける先住民概念	富沢寿男 (14)
東南アジアにおけるジャワ移民	染谷臣道 (15)
共生の構図 — ブギス・マカッサル人の移住・交易活動から	伊藤 真 (16)
タイ族の移住と先住民 — 「先住民／移住民」から 「山地民／平地民」へ	馬場雄司 (16)

資料・研究短報

国際アジア歴史学者会議 (IAHA) 東京大会について	寺田勇文 (17)
バジャウ研究の動向	赤嶺 淳 (18)
バンテン遺跡出土陶磁片共同調査の新資料	坂井 隆 (20)
ベトナムにおける歴史資料の状況について	嶋尾 稔 (22)
地区例会・研究会活動状況	(24)
新入会員・住所変更・事務局からのお願いなど	(26)

新会長挨拶

御挨拶 _____ 吉川利治

昨年の第50回研究大会において、会員の皆様の推挙を賜り、会長の大任を仰せつかりました。400名を越える会員を擁する学会の運営に責任の重大さを痛感するとともに、今年で28年目となる学会が積み重ねてきた英知を継承して、微力ながら学会の発展に全力で尽くす所存でございます。会員の皆様にはこれまで以上の御指導と御支援を賜りますよう、この場を借りてお願い申し上げます。

学会にかかわる数字をもうひとつあげさせていただきますと、『東南アジア歴史と文化』は今年で23号が刊行されます。歴代の会長をはじめ委員の方々、会員各位の永年の御努力によって、優れた研究成果が蓄積されて参りました。私はこうした学術・研究成果の数々から多くの知識を学び、考え方や研究方法を学習して参りました。また研究大会や地区の月例会での発表や真剣な討論に強烈な刺激を受け、折に報告の場をいただいて批評を仰ぐという研鑽を受けて、ようやく論文らしきものが書けるようになったという感懷をもつものであります。口頭で行う研究発表には、その場で得られるさまざまな角度からのコメントや批評がたいそう有益でした。研究者の新しい研究発表や報告からは、その内容から得る知識とともに、そこで交わされる真摯な議論の中に、いくつもの考えるヒントを見いだし、その後の研究に生かすことができたと、感謝しております。

年に2回、一堂に会して新しい研究を披瀝し議論をかさねる意義については、いまさら私が申しあげるまでもありません。全国的に増えた東南アジアをフィールドとする研究者が、各地区の研究会で報告するのも、知識を吸収し研究の刺激を与え合う、学術研究交流の良い機会となるはずであります。会員400名のさらなる学術研究交流の場として、学会が奉仕し貢献できるよう努力致したいと思っております。会員の皆様の活発な御参加を期待しております。

さて、学会の25周年記念に設けられた研究助成基金は、順調にその主旨を發揮しつつあります。しかし、郵送料の値上げや大会運営費の増大を抱えて、学会の財政はいささかも気の抜けない状況にあります。研究交流の活発化を念じながら、支出を抑え収入を増やすねばならないという矛盾に、私どももまた悩まされることになりそうです。良い解決方法がありましたら、事務局までお教えいただきたく存じます。そして会員の皆様のさらなる御支援と御協力を重ねてお願いする次第であります。

なお、新委員は次の方々に委嘱いたしました。あわせて御報告申し上げます。

第15期委員（敬称略、任期は1995年12月31日まで）

（庶務）深見純生 （会計）八尾隆生、清水政明 （編集）石井和子、古田元夫、弘末雅士、西井涼子 （編集顧問）山本達郎、池端雪浦 （大会）鈴木恒之、倉沢愛子、末廣昭、桃木至朗 （渉外・学術情報）土屋健治 （渉外・学術情報顧問）市川健二郎、石井米雄 （北海道・東北地区）坪井善明 （関東地区）桜井由躬雄、嶋尾稔 （中部・北陸地区）馬場雄司 （関西地区）早瀬晋三、青山亨 （中国・

四国地区) 植村泰夫 (九州・沖縄地区) 伊野憲治 (会計監査) 後藤乾一
また、事務局は下記に置きます。

〒562 大阪府箕面市粟生間谷東8丁目1-1
大阪外国語大学地域文化学科 八尾隆生 研究室 内
☎(0727)-28-3111 Ext. 736 Fax.(0727)-28-3557
郵便振替 00930-4-21342 (東南アジア史学会)

中村孝志先生追悼

中村孝志先生のご逝去を悼む 東南アジア史学会会長 吉川 利治

中村孝志先生が1994年4月6日にお亡くなりになりました。中村先生は東南アジア史学会の第七期会長として1978年から1979年の間、学会の発展に尽されました。とりわけ『東南アジア史学会会員著作論文目録』は中村会長のもとで企画されたと記憶しております。また、東南アジア史学会関西例会が1976年に発足したとき、先生は最初の会合から参加して、例会の発展に尽力しておられました。その後も、常連として若手の研究者の発表を頻繁に聞きにきておられましたが、近年は間遠になっていましたところ、昨年の春に久しぶりに出席しておられましたのが最後となりました。

中村先生がながらく主宰しておられました天理南方文化研究会の研究雑誌『南方文化』は、年に一回の出版を続けてきて、昨年ちょうど20周年を迎えたところでした。われわれ特に関西に住む研究者のなかには、お世話になった人も多いのではないかと思います。

私にとりましては、文部省科学研究費の「文化摩擦」で中村先生と同じ班に所属し、先生がすでに始めておられた明治時代にタイへ渡って行った日本人蚕業顧問技師研究の後を受けて、タイ側の文献資料から研究を始めた時、中村先生から蚕業顧問技師の遺族の方々を紹介していただきました。実はこの時、先生のご尊父が台湾からタイへ渡った蚕業顧問技師のおひとりであったことを知りました。先生のご案内で山形県や滋賀県の遺族のお宅を訪問した時、保存されている仲間同士でやりとりしていた写真や葉書や手紙の中から、ご尊父の写真や筆跡を発見して懐かしそうにながめながらメモしておられたお姿を思い出します。この旅の道中で、先生が台湾生まれで旧制台北帝大で史学を学ばれたこと、オランダに留学されたことなど、断片的にお窺いしました。先生の晩年の研究業績に台湾関係の内容が多いのも、またオランダ時代の台湾番社戸口表を最後に発表しておられるのも、先生のそうした経歴からなるほどと理解できるとともに、興味深いお話をもっと沢山おうかがいできたのではないかと悔やまれてなりません。

先生のご冥福をお祈り申しあげます。

四国地区) 植村泰夫 (九州・沖縄地区) 伊野憲治 (会計監査) 後藤乾一
また、事務局は下記に置きます。

〒562 大阪府箕面市粟生間谷東8丁目1-1
大阪外国语大学地域文化学科 八尾隆生 研究室 内
☎(0727)-28-3111 Ext. 736 Fax.(0727)-28-3557
郵便振替 00930-4-21342 (東南アジア史学会)

中村孝志先生追悼

中村孝志先生のご逝去を悼む 東南アジア史学会会長 吉川 利治

中村孝志先生が1994年4月6日にお亡くなりになりました。中村先生は東南アジア史学会の第七期会長として1978年から1979年の間、学会の発展に尽されました。とりわけ『東南アジア史学会会員著作論文目録』は中村会長のもとで企画されたと記憶しております。また、東南アジア史学会関西例会が1976年に発足したとき、先生は最初の会合から参加して、例会の発展に尽力しておられました。その後も、常連として若手の研究者の発表を頻繁に聞きにきておられましたが、近年は間遠になっていましたところ、昨年の春に久しぶりに出席しておられましたのが最後となりました。

中村先生がながらく主宰しておられました天理南方文化研究会の研究雑誌『南方文化』は、年に一回の出版を続けてきて、昨年ちょうど20周年を迎えたところでした。われわれ特に関西に住む研究者のなかには、お世話になった人も多いのではないかと思います。

私にとりましては、文部省科学研究費の「文化摩擦」で中村先生と同じ班に所属し、先生がすでに始めておられた明治時代にタイへ渡って行った日本人蚕業顧問技師研究の後を受けて、タイ側の文献資料から研究を始めた時、中村先生から蚕業顧問技師の遺族の方々を紹介していただきました。実はこの時、先生のご尊父が台湾からタイへ渡った蚕業顧問技師のおひとりであったことを知りました。先生のご案内で山形県や滋賀県の遺族のお宅を訪問した時、保存されている仲間同士でやりとりしていた写真や葉書や手紙の中から、ご尊父の写真や筆跡を発見して懐かしそうにながめながらメモしておられたお姿を思い出します。この旅の道中で、先生が台湾生まれで旧制台北帝大で史学を学ばれたこと、オランダに留学されたことなど、断片的にお窺いしました。先生の晩年の研究業績に台湾関係の内容が多いのも、またオランダ時代の台湾番社戸口表を最後に発表しておられるのも、先生のそうした経歴からなるほどと理解できるとともに、興味深いお話をもっと沢山おうかがいできたのではないかと悔やまれてなりません。

先生のご冥福をお祈り申しあげます。

第15期会長選出経過報告

第14期選挙管理委員会代表 古田元夫

第15期会長選出のための会長推薦委員の選挙は、1993年10月に行われ、有資格会員340名中 120名の会員が投票に参加し、有効投票総数は 119であった。開票の結果、池端雪浦、石井米雄、石澤良昭、後藤乾一、桜井由躬雄、土屋健治、吉川利治の 7 名の会員が会長推薦委員に選出された。辞退者はなく、会長推薦委員会はこの 7 名で構成されることになった。推薦委員会は1993年12月3日と4日の両日、静岡県立大学で開催され、委員全員の賛同を得て、吉川利治会員を会長候補として推薦することになった。会長推薦委員会の結果は、12月5日の第50回大会に際しての秋期会員総会に報告され、この会員総会において吉川利治会員が第15期会長に選出された。

1993年度秋期会員総会摘要

1993年度秋季会員総会は、12月5日に深見純生会員を議長として、静岡県立大学国際関係学部内で開催された。

《報告事項》

1。寺田庶務委員より、1993年11月末現在の会員数は 393名（うち学生会員約70名）であることが報告された。大会開催中に登録された新会員を含めると、会員総数は400名を超えたことが明らかにされた。会費を2年以上滞納している者については、会員名簿から削除すること、および根本編集委員の在外研究にともない、その後任を石井和子会員に委嘱したことが報告された。また、東南アジア史学会は学術団体として日本学術会議に登録されることになり、東洋学（第1部）の研究連絡委員会に推薦人1名を推薦する必要があり、明石陽至前会長をその候補とすることが報告された。

2。奥平会計委員より、1993年度一般会計中間報告、および研究助成基金に関する会計中間報告があった。

3。桃木編集委員より、『東南アジア歴史と文化』第23号の編集状況について報告があった。

4。古田大会委員より、第50回研究大会の準備等について報告があった。また、第51回大会は東京大学（本郷）で開催する予定との報告があった。

5。土屋学術情報委員より、国際アジア歴史学者会議（IAHA）第13回大会をはじめとする国際学会についての紹介、報告があった。

《審議事項》

1。東南アジア史学会選挙管理委員会の古田委員長より、第15期会長候補者として吉川利治会員が推挙されたとの報告があり（「第15期会長選出経過報告」参照）、全会一致で吉川会員を次期会長とすることを承認した。

2。第51回研究大会を東京大学で開催することを全会一致で承認した。

3。石澤会長より、国際アジア歴史学者会議（IAHA）第13回東京大会に学会として協

第15期会長選出経過報告

第14期選挙管理委員会代表 古田元夫

第15期会長選出のための会長推薦委員の選挙は、1993年10月に行われ、有資格会員340名中 120名の会員が投票に参加し、有効投票総数は 119であった。開票の結果、池端雪浦、石井米雄、石澤良昭、後藤乾一、桜井由躬雄、土屋健治、吉川利治の 7 名の会員が会長推薦委員に選出された。辞退者ではなく、会長推薦委員会はこの 7 名で構成されることになった。推薦委員会は1993年12月3日と4日の両日、静岡県立大学で開催され、委員全員の賛同を得て、吉川利治会員を会長候補として推薦することになった。会長推薦委員会の結果は、12月5日の第50回大会に際しての秋期会員総会に報告され、この会員総会において吉川利治会員が第15期会長に選出された。

1993年度秋期会員総会摘要

1993年度秋季会員総会は、12月5日に深見純生会員を議長として、静岡県立大学国際関係学部内で開催された。

《報告事項》

1。寺田庶務委員より、1993年11月末現在の会員数は 393名（うち学生会員約70名）であることが報告された。大会開催中に登録された新会員を含めると、会員総数は400名を超えたことが明らかにされた。会費を2年以上滞納している者については、会員名簿から削除すること、および根本編集委員の在外研究にともない、その後任を石井和子会員に委嘱したことが報告された。また、東南アジア史学会は学術団体として日本学術会議に登録されることになり、東洋学（第1部）の研究連絡委員会に推薦人1名を推薦する必要があり、明石陽至前会長をその候補とすることが報告された。

2。奥平会計委員より、1993年度一般会計中間報告、および研究助成基金に関する会計中間報告があった。

3。桃木編集委員より、『東南アジア歴史と文化』第23号の編集状況について報告があった。

4。古田大会委員より、第50回研究大会の準備等について報告があった。また、第51回大会は東京大学（本郷）で開催する予定との報告があった。

5。土屋学術情報委員より、国際アジア歴史学者会議（IAHA）第13回大会をはじめとする国際学会についての紹介、報告があった。

《審議事項》

1。東南アジア史学会選挙管理委員会の古田委員長より、第15期会長候補者として吉川利治会員が推挙されたとの報告があり（「第15期会長選出経過報告」参照）、全会一致で吉川会員を次期会長とすることを承認した。

2。第51回研究大会を東京大学で開催することを全会一致で承認した。

3。石澤会長より、国際アジア歴史学者会議（IAHA）第13回東京大会に学会として協

力していきたいとの提案があった。東京大会組織委員長および事務局長より大会に関する説明があり、学会からモラル・サポートを含めて一人でも多くの会員に参加してもらいたいとの発言があった。審議の後、学会として種々の協力をすることを決議したい、との発議があり、全会一致で承認した。

最後に、1993年12月末で任期を満了する石澤会長、および第15期の吉川新会長よりそれぞれ挨拶があった。また、会員より第14期の石澤会長および各委員に対して感謝する旨が述べられた。

第14期第4回委員会摘録

1993年12月4・5日、静岡県立大学で寺田庶務委員が議長となり、第4回委員会を開催し、第50回研究大会（於静岡県立大学）の準備状況、各委員よりの報告があった。第14期会長の任期満了にともなう第15期会長の選出について選挙管理委員長より報告があったほか、総会案件、次回大会等について審議した。以下はその骨子である。

1。寺田庶務委員より、1993年11月末現在の会員数は393名（うち学生会員約70名）であることが報告された。また、会費を2年以上滞納している者については、会員名簿から削除することが了承された。根本編集委員の在外研究にともない、その後任を石井和子会員に委嘱することを了承した。今年度前半より進めていた東南アジア史学会を学術団体として日本学術会議に登録する件は、とどおりなく完了した。学会としては東洋学（第1部）の研究連絡委員会に推薦人1名を推薦することになり、その候補を明石陽至前会長とすることが了承された。

2。第15期会長候補者として吉川利治会員が推挙されたことが、古田元夫東南アジア史学会選挙管理委員長より報告があった（「第15期会長選出経過報告」参照）。

3。奥平会計委員より、1993年度会計中間報告、および研究助成基金に関する会計中間報告があった。

4。桃木編集委員より、『東南アジア歴史と文化』第23号の編集状況について報告があった。

5。古田大会委員より、第50回研究大会の準備について報告があった。また、第51回大会は東京大学（本郷）で開催することとの報告があった。

6。土屋学術情報委員および石井同顧問より、国際アジア歴史学者会議（IAHA）第13回大会が東京で開催されることについて報告があり、審議の結果、学会としても積極的に協力することで合意し、会員に参加を呼びかけることになった。

7。各地区委員より、例会等の活動報告があった。

最後に石澤会長より、第14期には、財政的努力、学会費改訂、会員名簿刊行に加えて、学会活動をより広範なものとするために東京、大阪以外に北海道、静岡でも研究大会を開催できたことが報告され、各委員および各大会準備委員長の協力に感謝したい旨の発言があった。

力していきたいとの提案があった。東京大会組織委員長および事務局長より大会に関する説明があり、学会からモラル・サポートを含めて一人でも多くの会員に参加してもらいたいとの発言があった。審議の後、学会として種々の協力をすることを決議したい、との発議があり、全会一致で承認した。

最後に、1993年12月末で任期を満了する石澤会長、および第15期の吉川新会長よりそれぞれ挨拶があった。また、会員より第14期の石澤会長および各委員に対して感謝する旨が述べられた。

第14期第4回委員会摘録

1993年12月4・5日、静岡県立大学で寺田庶務委員が議長となり、第4回委員会を開催し、第50回研究大会（於静岡県立大学）の準備状況、各委員よりの報告があった。第14期会長の任期満了にともなう第15期会長の選出について選挙管理委員長より報告があったほか、総会案件、次回大会等について審議した。以下はその骨子である。

1。寺田庶務委員より、1993年11月末現在の会員数は393名（うち学生会員約70名）であることが報告された。また、会費を2年以上滞納している者については、会員名簿から削除することが了承された。根本編集委員の在外研究にともない、その後任を石井和子会員に委嘱することを了承した。今年度前半より進めていた東南アジア史学会を学術団体として日本学術会議に登録する件は、とどおりなく完了した。学会としては東洋学（第1部）の研究連絡委員会に推薦人1名を推薦することになり、その候補を明石陽至前会長とすることが了承された。

2。第15期会長候補者として吉川利治会員が推挙されたことが、古田元夫東南アジア史学会選挙管理委員長より報告があった（「第15期会長選出経過報告」参照）。

3。奥平会計委員より、1993年度会計中間報告、および研究助成基金に関する会計中間報告があった。

4。桃木編集委員より、『東南アジア歴史と文化』第23号の編集状況について報告があった。

5。古田大会委員より、第50回研究大会の準備について報告があった。また、第51回大会は東京大学（本郷）で開催することとの報告があった。

6。土屋学術情報委員および石井同顧問より、国際アジア歴史学者会議（IAHA）第13回大会が東京で開催されることについて報告があり、審議の結果、学会としても積極的に協力することで合意し、会員に参加を呼びかけることになった。

7。各地区委員より、例会等の活動報告があった。

最後に石澤会長より、第14期には、財政的努力、学会費改訂、会員名簿刊行に加えて、学会活動をより広範なものとするために東京、大阪以外に北海道、静岡でも研究大会を開催できたことが報告され、各委員および各大会準備委員長の協力に感謝したい旨の発言があった。

1993年度会計決算報告(案)

1993年1月1日～12月31日

1994年1月20日

第14期会計担当委員 奥平龍二・今村宣勝

A. 一般会計

I. 収入の部	円	II. 支出の部	円
1. 一般会員会費	2,144,000	1. 会誌関係	
2. 学生会員会費	354,500	(1)誌代	1,207,440
3. 預貯金利子	2,689	(2)編集費	139,412
4. 会誌学会在庫売上	226,680	小計	1,346,852①
5. 業績目録売上	5,600	2. 会報関係	
6. 業績目録補遺売上	7,600	(1)作成費	396,756
7. 会員名簿売上	10,675	(2)郵送費	101,984
8. 会報広告掲載料	80,000	小計	498,740②
9. 前年度繰越金	750,969	3. 大会関係	
合計	3,582,713	(1)ポスター作成費	61,800
III. 残額(次年度繰越金)		(2)予報費、郵送費、	
収入合計	3,582,713	事務諸経費等	190,114
支出合計	3,168,144	(3)運営費	486,401
残額	414,569	小計	738,315③
* 残額内訳		4. 名簿関係	
郵便局(普通)	115,527	(1)作成費	304,280
郵便局(振替)	291,405	(2)郵送費	50,310
現金(庶務)	7,637	小計	354,590④
	414,569	5. 会長選挙費	58,238⑤
		6. 委員会・事務局経費	171,409⑥
		以上(①～⑥)合計	3,168,144

会計監査報告

会計簿、預貯金残高記載書類、領収証控帳を点検した結果、誤りのないことを確認致しました。

1994年1月31日 会計監査委員 吉川利治 印

B. 研究助成基金会計

I. 基 金

前年度繰越金	3,010,010	* 内訳 郵便局 1年定期 1,000,000
新規寄付金	440,000	郵便局 1年定期 1,600,000
基金合計	3,440,010	郵便局（普通） 840,010

II. 基金運用会計

1. 基金運用収入

日付	適用	収入
(1) 01/01	前年度繰越金	74,266
(2) 04/01	普通貯金に対する利子	2,999
(3) 06/12	1年定期 (1,000,000)に対する利子	29,280
(4) 11/21	1年定期 (1,600,000)に対する利子 +)	48,896
	小計	155,441……①

2. 基金運用支出

日付	適用	支出
(1) 06/05	岡田建志 (北海道大会)	33,000
(2) 07/27	豊田和規 (北海道大会)	33,000
(3) 12/04	渡辺敦 (静岡大会)	19,000
(4) 12/04	西村昌也 (静岡大会)	11,000
(5) 12/04	ミン・ニョウ (静岡大会) +)	12,000
	小計	108,000……②

3. 基金運用残高 (① - ②)

基金運用収入 (①)	155,441
基金運用支出 (②)	-) 108,000
残高 (次年度基金運用会計への繰越金)	47,441

会計監査報告

会計簿、貯金残高記載書類、領収証控帳を点検した結果、誤りのないことを確認致しました。

1994年1月31日 会計監査委員 吉川利治 印

第50回研究大会報告

東南アジア史学会第50回研究大会（1993年度秋季大会）は、静岡県立大学で1993年12月3日（金）、4日（土）、5日（日）の3日間にわたり開催された。同大国際関係学部の鈴木静夫会員に大会準備委員長をお引き受けいただき、自由研究発表、特別講演のほかに、シンポジウム＜東南アジア史における先住民と移住民＞が行われ、大会全体を通じ100名近くの出席者があり盛会となった。また、第50回大会を記念して行われた12月3日夜の特別講演会には、会員に加えて静岡県立大学の学生を中心として200名近くの出席者があった。

プログラム

12月3日（金）

第50回大会記念特別講演会

18:00～19:30 歴史として見る東南アジアと日本
.....(東京大学名誉教授) 山本 達郎

12月4日（土）

13:30 開会の辞 大会準備委員長（静岡県立大学）鈴木 静夫
自由研究発表

13:40 19世紀中期コンバウン朝ビルマの行政改革
.....(名古屋大学大学院) ミン・ニョウ

14:20 国家をもてなす伝統 — インドネシア、南バンテンのカスプハン

Kasepuhan とポリティ(京都大学研修員) 渡辺 敦

15:15 タイの社会階層と教育(アジア経済研究所) 船津 鶴代

15:55 BC2000年紀前半 — 東南アジア大陸における一つの画期
.....(東京大学大学院) 西村 昌也

特別講演

16:35 Thai Study in Thailand: A Reconsideration
.....(Silparkorn University 教授・天理大学客員教授) Pornpen Hantrakool

12月5日（日）

シンポジウム＜東南アジア史における先住民と移住民＞

9:20 趣旨説明(静岡県立大学) 玉置 泰明

9:30 ヨーロッパ人とインディアス(大東文化大学) 生田 澄

10:10 マレーシアにおける先住民概念(静岡県立大学) 富沢 寿男

10:50 東南アジアにおけるジャワ移民(静岡大学) 染谷 臣道

11:30 共生の構図 — ブギス・マカッサル人の移住・交易活動から
.....(東京都立大学) 伊藤 真

12:10 星食（委員会）

13:10 会員総会

13:50 タイ族の移住と先住民 — 「先住民／移住民」から 「山地民／平地民」へ	(同朋大学) 馬場 雄司
14:30 総合討論	(司会) (東京大学) 加納 啓良 (東京大学) 古田 元夫
16:00 閉会の辞	会長 石澤 良昭

第50回大会記念特別講演要旨

歴史として見る東南アジアと日本 山本 達郎

ここでいう歴史、東南アジア史学会の歴史、という言葉は広い意味で用いたもので、時間的な変化によって辿る人間の営みを広く指していると言ってよい。文献史学の意味ではない。歴史という学問は漠然として常識的であると同時に包括的である。人間の営みを取扱う多くの専門分野において、組織的で合理的な知識、特に法則性を重視する分野では、その目的に役立たない材料を排除して成立っているものがあるが、歴史学には本来それがない。学問の各種の専門分野の中で、総てを包括できるのは唯一歴史だけである。

日本で東南アジア史の研究が進んできた経過を辿ってみると、それはまず東洋史の一部として発展してきたと認められる。“東洋史”という名称はもともと日清戦争（1894～95）の時期に、日本の大陸への進出を背景に中等学校の学科目として用いられるようになったもので、研究の面では中国・朝鮮・“満洲”に重点があった。東南アジア史に関する最初の業績として注目されるのは1911年に出版された藤田豊八の島夷誌略校注（漢文）で、日本に於ける漢学の伝統をよく生かした業績である。1928年に台北帝国大学ができて南洋史学科が設立されたのは東南アジア史研究として画期的な出来事で、その後太平洋戦争時代にかけて多くの研究機関が活動したが、敗戦と共に殆ど総てが崩壊してしまった。東南アジア史学会の前身は戦時に遡ることができるが、東南アジアという地域の名称は戦後に広く用いられるようになったものである。オランダは18世紀の後半、フランスでは19世紀の末葉からこの方面的文化・歴史の研究が展開したが、それぞれ自国の植民地の研究であって、各国で東南アジア史をまとめて取扱うようになるのは1950年代以後のことである。この地域を広く含めてどのような歴史が書けるか、幾つかの試みはあるものの、多くの研究者に共通する歴史像はまだ出来ていないと言わざるを得ない。

しかしそれにしても誰もが認める東南アジア史の特徴を幾つか挙げてみることは出来よう。(1)高温多湿のモンスーン地帯で農業、特に米作が広く行われていること、(2)地形が複雑で半島と数え切れない程の多くの島々を含み、森林・河川流域のほか、海と結びついた生活活動、海上交通・貿易・漁業が重要なこと、(3)多様な地形と民族移動の結果、民族構成が世界一複雑になっており、大きな統一国家が作られなかったこと、(4)旧石器時代以来蓄積された基層文化の上に東洋の高度の諸文明－中国・インド

・イスラム文明ーが次々に波及しており、(5)更に16世紀以来西洋のポルトガル・スペイン・オランダ・イギリス・フランス・アメリカの政治・経済・文化が大きな影響を及ぼし、また中国人が各地に移住して経済活動を展開させたこと、(6)太平洋戦争の時代に日本が東南アジアの略全域を占領し、日本の敗戦を契機に全域が独立国家として発展するようになったこと、そして現在の国境は19世紀、20世紀の植民地支配の領域を継承していること、(7)外部から東洋・西洋の各種の影響を受けながら独自の文化を展開させて、近年のアセアン諸国に見られるように政治・経済の面でも自主的な活動を行っていること、などがある。

現在世界の歴史には未だ曾てない大きな変動が起っており、東南アジア史に限らず、歴史の学問そのものが根本的に変りつつあることに注目しなければならない。近代の歴史学は19世紀に発達したもので、何が実際に起ったかという事実の解明がまずその出発点であった。しかし、過去の事実を考えるのは現在生きているわれわれであるから、われわれは現在から過去に向って問い合わせを行い、過去はまた現在に向って問い合わせてくるという形で、歴史は過去と現在との対話であると見られるようになった。しかしそればかりではない。われわれは未来に向って生きているのであるから、未来をどのようなものとして考えるかということが、過去の見方を変化させることになる。未来の社会をどう考えるかによって、過去の歴史像が変化することは多くの事例が示している。歴史学は過去の事実を取扱う学問であるが、これを歴史に対する関心の持ち方と、歴史事実の解明と、事実をどのように組織し理論化するかという三つの角度から根本に遡って検討することが、特にこのような変動期には重要である。

異った民族・国家を理解するためには、相手の立場に立って、相手の歴史・文化を自らのものとして考えてみなければならず、その上で更に自らの立脚点に立ち返り、更に第三者の見解をも取り入れて総合的な見解を組み立てなければならない。そのような仕事を進めるためには、どうしても人間として相手にどのように働きかけるかという倫理の問題が重要になってくる。

自由研究発表要旨

19世紀中期コンバウン朝ビルマの行政改革——ミン・ニョウ

コンバウン朝後期の政体について、これまで専制君主制、独裁制などとして理解されている。ここでは、19世紀後期のすぐれた行政官であり思想家であったウー・ボーラインにかかる問題をとりあげ、これまでの見解を修正したい。

ティボー王（1878-85）の大蔵大臣であったウー・ボーラインは、1879年とつぜん解任される。当時すでに下ビルマを支配していたイギリス政府はこの政変を、官僚層内で立憲君主派が伝統派によって排撃された結果であると論評した。つまり、親英的立憲君主派が、旧来の独裁制を維持せんとする体制派によって弾圧されたという理解になっていた。

・イスラム文明ーが次々に波及しており、(5)更に16世紀以来西洋のポルトガル・スペイン・オランダ・イギリス・フランス・アメリカの政治・経済・文化が大きな影響を及ぼし、また中国人が各地に移住して経済活動を展開させたこと、(6)太平洋戦争の時代に日本が東南アジアの略全域を占領し、日本の敗戦を契機に全域が独立国家として発展するようになったこと、そして現在の国境は19世紀、20世紀の植民地支配の領域を継承していること、(7)外部から東洋・西洋の各種の影響を受けながら独自の文化を展開させて、近年のアセアン諸国に見られるように政治・経済の面でも自主的な活動を行っていること、などがある。

現在世界の歴史には未だ曾てない大きな変動が起っており、東南アジア史に限らず、歴史の学問そのものが根本的に変りつつあることに注目しなければならない。近代の歴史学は19世紀に発達したもので、何が実際に起ったかという事実の解明がまずその出発点であった。しかし、過去の事実を考えるのは現在生きているわれわれであるから、われわれは現在から過去に向って問い合わせを行い、過去はまた現在に向って問い合わせてくるという形で、歴史は過去と現在との対話であると見られるようになった。しかしそればかりではない。われわれは未来に向って生きているのであるから、未来をどのようなものとして考えるかということが、過去の見方を変化させることになる。未来の社会をどう考えるかによって、過去の歴史像が変化することは多くの事例が示している。歴史学は過去の事実を取扱う学問であるが、これを歴史に対する関心の持ち方と、歴史事実の解明と、事実をどのように組織し理論化するかという三つの角度から根本に遡って検討することが、特にこのような変動期には重要である。

異った民族・国家を理解するためには、相手の立場に立って、相手の歴史・文化を自らのものとして考えてみなければならず、その上で更に自らの立脚点に立ち返り、更に第三者の見解をも取り入れて総合的な見解を組み立てなければならない。そのような仕事を進めるためには、どうしても人間として相手にどのように働きかけるかという倫理の問題が重要になってくる。

自由研究発表要旨

19世紀中期コンバウン朝ビルマの行政改革——ミン・ニョウ

コンバウン朝後期の政体について、これまで専制君主制、独裁制などとして理解されている。ここでは、19世紀後期のすぐれた行政官であり思想家であったウー・ボーラインにかかる問題をとりあげ、これまでの見解を修正したい。

ティボー王（1878-85）の大蔵大臣であったウー・ボーラインは、1879年とつぜん解任される。当時すでに下ビルマを支配していたイギリス政府はこの政変を、官僚層内で立憲君主派が伝統派によって排撃された結果であると論評した。つまり、親英的立憲君主派が、旧来の独裁制を維持せんとする体制派によって弾圧されたという理解になっていた。

ウー・ボーラインの立憲君主論は、議会によって法令を審議し、国王、王族に対しては給与制を導入することであった。また、予算制度の設立、中央銀行の設立、自由主義経済の拡張をめざしていた。たしかに彼は、西洋の経済発展が議会制にあることは認識していたが、彼の立論の基礎には、仏教思想があったと言わねばならない。

ここで実際の行政改革の推移をみてみると、ミンドン王（1852－78）時代には民事裁判権と刑事裁判権の分権化、ミョウザー・システム（食邑制）の給与制度化、さらにルットー（閣僚評議会）の四分割化が押し進められた。これはビルマ史上、官僚に三権分立を与えた最初の事例として特筆される。ティボー王時代には政府を14の省庁に分割し、立法は高級官僚からなる会議によって行われ、そして最初の予算が組まれた。

つまり、コンバウン朝後期の行政改革は、基本的には立憲君主制的方向で進んでおり、ウー・ボーライン解任後もこの方向は堅持されていたことがわかる。したがって、少なくともコンバウン朝後期は独裁制という見解はあたらない。つまり、當時専制君主制を押し進めるという考え方は存在しなかったし、立憲君主制的思想もビルマにもともと存在していたのである。

私見によれば、当時の官僚層は、反英ということで一致していた。したがって、ウー・ボーラインが解任された理由は、反英政策を急進的に押し進めるか、穩健的に進めるかの対立によるものと考えることができよう。

国家をもてなす伝統 — インドネシア、南バンテンの

カスプハン Kasepuhan とポリティ —————— 渡辺 敦

インドネシア、西ジャワ州南バンテンにはカスプハンと呼ばれる特色ある村落ポリティが知られている。報告では、カスプハンし村を例に、その仕組みを概観しながら、変化と持続について政治文化論的に考察を試みた。

カスプハンのリーダーシップはススプレーと呼ばれる地位を頂点とした世襲制の長老組織にある。領分権限を分け合う一方で、総じてススプレーの斎田の耕作労働の組織化、住民からの種々の税・貢納の徴収、慣習に基づいた紛争処理にあたるのを役割とする。その地位の正当性は父系的継承そのものに求められる。この論理は、「始源よりカスプハンの慣習と伝統を守護してきたススプレーとその従者の系譜」という伝承的図式から来ているが、これが空虚な循環論となるのは、長老たちの活動とその意味 자체がし村民の生活過程と生活空間に巧妙にリンクしているからである。斎田を起点とする単一の稻作サイクルに基づいた時間の共同性、東／西、上／下のシンボリズムによる集落の空間組織がそれであり、住民は儀礼と日常生活の隅々からこの時空間に参与し、また自ら構築するゲームを展開しているのである。

別の特徴は、それが単一の均質なポリティではなく、異なる伝承的系譜を主張する2つの同型的な長老組織の合体であり、それぞれに属する社会集団から領域内の諸集落全体が編成されているということである。そしてこの編成はシンボリックな空間

ウー・ポーラインの立憲君主論は、議会によって法令を審議し、国王、王族に対しては給与制を導入することであった。また、予算制度の設立、中央銀行の設立、自由主義経済の拡張をめざしていた。たしかに彼は、西洋の経済発展が議会制にあることは認識していたが、彼の立論の基礎には、仏教思想があったと言わねばならない。

ここで実際の行政改革の推移をみてみると、ミンドン王（1852－78）時代には民事裁判権と刑事裁判権の分権化、ミョウザー・システム（食邑制）の給与制度化、さらにルットー（閣僚評議会）の四分割化が押し進められた。これはビルマ史上、官僚に三権分立を与えた最初の事例として特筆される。ティボー王時代には政府を14の省庁に分割し、立法は高級官僚からなる会議によって行われ、そして最初の予算が組まれた。

つまり、コンバウン朝後期の行政改革は、基本的には立憲君主制的方向で進んでおり、ウー・ポーライン解任後もこの方向は堅持されていたことがわかる。したがって、少なくともコンバウン朝後期は独裁制という見解はあたらない。つまり、當時専制君主制を押し進めるという考え方は存在しなかったし、立憲君主制的思想もビルマにもともと存在していたのである。

私見によれば、当時の官僚層は、反英ということで一致していた。したがって、ウー・ポーラインが解任された理由は、反英政策を急進的に押し進めるか、穩健的に進めるかの対立によるものと考えることができよう。

国家をもてなす伝統 — インドネシア、南バンテンの

カスプハン Kasepuhan とポリティ —————— 渡辺 敦

インドネシア、西ジャワ州南バンテンにはカスプハンと呼ばれる特色ある村落ポリティが知られている。報告では、カスプハンし村を例に、その仕組みを概観しながら、変化と持続について政治文化論的に考察を試みた。

カスプハンのリーダーシップはススプレーと呼ばれる地位を頂点とした世襲制の長老組織にある。領分権限を分け合う一方で、総じてススプレーの斎田の耕作労働の組織化、住民からの種々の税・貢納の徴収、慣習に基づいた紛争処理にあたるのを役割とする。その地位の正当性は父系的継承そのものに求められる。この論理は、「始源よりカスプハンの慣習と伝統を守護してきたススプレーとその従者の系譜」という伝承的図式から来ているが、これが空虚な循環論となるのは、長老たちの活動とその意味 자체がし村民の生活過程と生活空間に巧妙にリンクしているからである。斎田を起点とする単一の稻作サイクルに基づいた時間の共同性、東／西、上／下のシンボリズムによる集落の空間組織がそれであり、住民は儀礼と日常生活の隅々からこの時空間に参与し、また自ら構築するゲームを展開しているのである。

別の特徴は、それが単一の均質なポリティではなく、異なる伝承的系譜を主張する2つの同型的な長老組織の合体であり、それぞれに属する社会集団から領域内の諸集落全体が編成されているということである。そしてこの編成はシンボリックな空間

組織に合致していく、西の下位集団が東の上位集団に貢納の義務を負うのである。

ここには次のような政治論的意味がある。し村は伝統的に自律的なポリティをなしてきただが、国家の末端としても早くから行政村デサに位置づけられ、国家に権限を付与された公選制の村長を置いてきた。しかし、その村長は常に西の領域に置かれてきたのである。これは東が国家との直接的関係を避け、選挙という異質なルールを遠ざける政治術であった。東にとって西は、貢納の贈り手であつただけでなく中心に対する周辺であり国家に対する緩衝域でもあった。ただし下位集団には、経済活動や娯楽などにおいて上位集団に比して慣習的統制はより緩やかであった。これは中心－周辺論を支える文化政策であると捉えることができる。

近年インドネシアでは、伝統的ポリティのデサへの分割と再編統合が進行している。し村においても80年代以降二度にわたるデサ分割で、従来の仕組みに3つのデサが重なるという複雑な状況が生まれた。しかし、この伝統的体系はなお重大な変化を蒙ってはおらず、新たな状況にうまく適応しているように見える。「国家をもてなす伝統」とはし村の村長の言葉だが、自らの伝統文化を軸に内的に、また対国家的にその世界を構築する以上のような過程を理解する上で鍵概念となり得よう。

タイの社会階層と教育

船津 鶴代

タイ社会の階層と移動の問題は、従来「官僚政体論」の枠組みに依拠して説明され、このため先行研究は専ら軍・行政官僚エリートの出身属性に焦点を当てたものになっている。しかし、政治権力を独占した段階での集団を扱うこの論理では、ある者が特定の地位につくまでの経路が明らかにされず、また立憲革命以来の連続性を強調するあまり、エリート集団が専門・経営職を含んで多様化する現代の変動の諸側面に十分光が当たらない。

本報告はこうした点を補う第一歩として、現代における社会移動を主に媒介する制度としての教育に着目し、人々がどこから（生まれついた地位や場所）、どのように教育を経由し（学歴）、どこへ（職業）至るか、その移動パターンの概略的な把握を試みた。

タイの教育制度は、チャクリ改革における教育導入が王族の地位再生産の装置として意図されたように、当初は強い庇護移動の傾向をもって始まった。しかし、時代の社会経済的要請や新たな実力集団による血統・属性主義への挑戦によって教育のすそ野は広がり、教育機会はごく限られた王族・貴族から都市居住者へと徐々にその範囲を拡大している。現状では、教育機会は首都バンコクに集中し、中学進学を機会に都市・農村出身者は振り分けられ、学歴によってその後の就業機会も大きく規定されている。しかし、近年では、産業構造の高度化に伴う農村人口の社会的再配置の必要などから、中等教育はついに農村にまで及びつつあり、この制度改変が就業パターンの変化等を通じて、タイの階層構造にどのような影響を及ぼすのか、今後の展開が注目される。

組織に合致していく、西の下位集団が東の上位集団に貢納の義務を負うのである。

ここには次のような政治論的意味がある。し村は伝統的に自律的なポリティをなしてきただが、国家の末端としても早くから行政村デサに位置づけられ、国家に権限を付与された公選制の村長を置いてきた。しかし、その村長は常に西の領域に置かれてきたのである。これは東が国家との直接的関係を避け、選挙という異質なルールを遠ざける政治術であった。東にとって西は、貢納の贈り手であつただけでなく中心に対する周辺であり国家に対する緩衝域でもあった。ただし下位集団には、経済活動や娯楽などにおいて上位集団に比して慣習的統制はより緩やかであった。これは中心－周辺論を支える文化政策であると捉えることができる。

近年インドネシアでは、伝統的ポリティのデサへの分割と再編統合が進行している。し村においても80年代以降二度にわたるデサ分割で、従来の仕組みに3つのデサが重なるという複雑な状況が生まれた。しかし、この伝統的体系はなお重大な変化を蒙ってはおらず、新たな状況にうまく適応しているように見える。「国家をもてなす伝統」とはし村の村長の言葉だが、自らの伝統文化を軸に内的に、また対国家的にその世界を構築する以上のような過程を理解する上で鍵概念となり得よう。

タイの社会階層と教育

船津 鶴代

タイ社会の階層と移動の問題は、従来「官僚政体論」の枠組みに依拠して説明され、このため先行研究は専ら軍・行政官僚エリートの出身属性に焦点を当てたものになっている。しかし、政治権力を独占した段階での集団を扱うこの論理では、ある者が特定の地位につくまでの経路が明らかにされず、また立憲革命以来の連続性を強調するあまり、エリート集団が専門・経営職を含んで多様化する現代の変動の諸側面に十分光が当たらない。

本報告はこうした点を補う第一歩として、現代における社会移動を主に媒介する制度としての教育に着目し、人々がどこから（生まれついた地位や場所）、どのように教育を経由し（学歴）、どこへ（職業）至るか、その移動パターンの概略的な把握を試みた。

タイの教育制度は、チャクリ改革における教育導入が王族の地位再生産の装置として意図されたように、当初は強い庇護移動の傾向をもって始まった。しかし、時代の社会経済的要請や新たな実力集団による血統・属性主義への挑戦によって教育のすそ野は広がり、教育機会はごく限られた王族・貴族から都市居住者へと徐々にその範囲を拡大している。現状では、教育機会は首都バンコクに集中し、中学進学を機会に都市・農村出身者は振り分けられ、学歴によってその後の就業機会も大きく規定されている。しかし、近年では、産業構造の高度化に伴う農村人口の社会的再配置の必要などから、中等教育はついに農村にまで及びつつあり、この制度改変が就業パターンの変化等を通じて、タイの階層構造にどのような影響を及ぼすのか、今後の展開が注目される。

BC2000年紀前半 — 東南アジア大陸における一つの画期——西村 昌也

更新世末から完新世前半にかけて、東南アジア大陸部全体を特徴づけるホアビニアン礫石器群が、いつ終末したかという問題は土器、磨製石器を基本遺物組成とする新石器時代がいつ始まるかという問題の裏返しでもある。かつて、北タイのデータなどから、BC5-6000年紀という予想以上に古い年代が想定されたこともあったが、近年のタイ、マレーシア、南ベトナムでのホアビニアン遺跡の調査の結果はそうした古い年代想定を不可能にし、BC3000年紀までホアビニアンが存続したようである。ただし、北部ベトナムでは最大海進期（BC5000年紀）に重なる Da But 貝塚遺跡群を始め、BC5000-3000年紀に属する前期新石器段階の遺跡が相次いで報告されている。北部ベトナムは広西・広東省等と並行して、大陸部では最も早く、BC5000年紀には、ホアビニアン礫石器群から前期新石器段階へ移行したようである。

BC2000年紀前半になると、定住農耕を予想させる大型の重層マウンド遺跡（例：Khok Phanom Di, Ban Chiang）等を含む後期新石器段階の遺跡が出現し、バラエティーに富む遺物や集団墓が見られるようになる。但し、この後期新石器段階の遺跡群は、少なくともタイ、マレーシアでは、北部ベトナムのような前期新石器段階を経ずに、かなり突発的に出現した可能性が高い。従って、定住性の高い農耕の出現期と考えられるBC2000年紀前半後の変容過程を理解するにあたって、北部ベトナムは暫時的、自律的な発展と理解できる一方、タイやマレーシアでは、むしろ他地域からの文化流入が変容の主因を占める可能性が高い。大陸部からマレー半島にかけての後期新石器段階の出現は、最近 Bellwood (1993: Asian Perspective No. 32-1) 等が論じているように、島嶼部東南アジアで新石器出現過程とオーストロネシア語族起源問題が絡むのと同じレベルで、民族形成問題の鍵を握る重要な画期といえよう。

特別講演要旨

Thai Study in Thailand: A Reconsideration ————— Pornpen Hantrakool

This talk simply aims at a brief remark on some aspects concerning condition, idea and methodology which are underlying the study of Thai studies in Thailand at present.

The talk will center at a concise history of the study of Thai studies, a short report on its present situation and stipulations for advancing Thai studies, as an intrinsic field of knowledge for the Thai, to seeking a new direction of more varieties of idea and methodology, as well as of much broader objectives in the study itself.

What the speaker is going to comment or stipulate here is mainly based on the speaker's assumption that the body of the Thai studies in Thailand always comes from abroad, otherwise is under foreign influence like many

BC2000年紀前半 — 東南アジア大陸における一つの画期——西村 昌也

更新世末から完新世前半にかけて、東南アジア大陸部全体を特徴づけるホアビニアン礫石器群が、いつ終末したかという問題は土器、磨製石器を基本遺物組成とする新石器時代がいつ始まるかという問題の裏返しでもある。かつて、北タイのデータなどから、BC5-6000年紀という予想以上に古い年代が想定されたこともあったが、近年のタイ、マレーシア、南ヴェトナムでのホアビニアン遺跡の調査の結果はそうした古い年代想定を不可能にし、BC3000年紀までホアビニアンが存続したようである。ただし、北部ヴェトナムでは最大海進期（BC5000年紀）に重なる Da But 貝塚遺跡群を始め、BC5000-3000年紀に属する前期新石器段階の遺跡が相次いで報告されている。北部ヴェトナムは広西・広東省等と並行して、大陸部では最も早く、BC5000年紀には、ホアビニアン礫石器群から前期新石器段階へ移行したようである。

BC2000年紀前半になると、定住農耕を予想させる大型の重層マウンド遺跡（例：Khok Phanom Di, Ban Chiang）等を含む後期新石器段階の遺跡が出現し、バラエティーに富む遺物や集団墓が見られるようになる。但し、この後期新石器段階の遺跡群は、少なくともタイ、マレーシアでは、北部ヴェトナムのような前期新石器段階を経ずに、かなり突発的に出現した可能性が高い。従って、定住性の高い農耕の出現期と考えられるBC2000年紀前半後の変容過程を理解するにあたって、北部ヴェトナムは暫時的、自律的な発展と理解できる一方、タイやマレーシアでは、むしろ他地域からの文化流入が変容の主因を占める可能性が高い。大陸部からマレー半島にかけての後期新石器段階の出現は、最近 Bellwood (1993: Asian Perspective No. 32-1) 等が論じているように、島嶼部東南アジアで新石器出現過程とオーストロネシア語族起源問題が絡むのと同じレベルで、民族形成問題の鍵を握る重要な画期といえよう。

特別講演要旨

Thai Study in Thailand: A Reconsideration ————— Pornpen Hantrakool

This talk simply aims at a brief remark on some aspects concerning condition, idea and methodology which are underlying the study of Thai studies in Thailand at present.

The talk will center at a concise history of the study of Thai studies, a short report on its present situation and stipulations for advancing Thai studies, as an intrinsic field of knowledge for the Thai, to seeking a new direction of more varieties of idea and methodology, as well as of much broader objectives in the study itself.

What the speaker is going to comment or stipulate here is mainly based on the speaker's assumption that the body of the Thai studies in Thailand always comes from abroad, otherwise is under foreign influence like many

other things else. Also, the adaptation of this "imported" knowledge, which is not much different from other "foreign goods," lacks solid harmonized continuity and strong internal criticism. This, and some more other factors, seem to be unable to help create originality, development and real value for the Thai study scholarship in modern Thailand, except only a few.

シンポジウム＜東南アジア史における先住民と移住民＞報告要旨

趣旨説明――――――玉置 泰明

本テーマの背景は「国際先住民年」である。しかし東南アジアにおける「先住民」はアメリカ大陸や豪大陸の場合のように自明の存在ではない。現在の東南アジア各国でも、誰を先住民とするかについて明確な合意（政府のだけではなく、研究者の間でも）が存在するとは言いがたい。さらに、歴史的に見れば東南アジアの各民族は、ある時点では移住民として、また別の時点では先住民として存在してきたと言えるだろう。実体あるいは概念としての特定の「民族」自体が、諸集団の移住や離合集散の繰り返しの中で形成されてきたと言う方がいいかも知れない。それゆえ我々が「東南アジア史における先住民」と言う場合、「国際先住民年」が対象とするような現代的意味での「先住民」だけではなく、歴史上の特定の時点での「先住民」をも対象とすべきであろう。様々な地域、様々な時点での先住民—移住民関係こそが、東南アジア史のダイナミズムを作ってきたという言い方も可能であろう。

例えばフィリピンの場合、スペイン人が到来した時点での「インディオ」すなわちすべての土着民族を「先住民」と考えることができる。ずっと遡って、先マレー系民族（ネグリート）が住んでいた群島にマレー系諸民族がやってきた時の関係も、先住民と移住民という図式でとらえることが可能である。それは諸集団が群島の各地に移動して定着していく過程の中でも繰り返しあったことであり、マレー系諸民族同士の関係についても言える、下っては、キリスト教徒が南部フィリピンに移住した際の「先住」のムスリム諸民族との関係も見落とせない。

また、「先住民」は「先住少数民族」のみならず「先住多数民族」をもふくむ。東南アジア史ではとくに、華僑・華人と先住諸民族の関係が重要なことは言うまでもない。

こうした様々なレベルでの先住民—移住民関係を「共生と摩擦」という視点からとりあげることによって、東南アジア史の新しい側面に光を当てることができれば幸いである。

ヨーロッパ人とインディアス――――――生田 滋

コロンブスに始まるヨーロッパ人のインディアス、すなわち新大陸進出は、厳しい、

other things else. Also, the adaptation of this "imported" knowledge, which is not much different from other "foreign goods," lacks solid harmonized continuity and strong internal criticism. This, and some more other factors, seem to be unable to help create originality, development and real value for the Thai study scholarship in modern Thailand, except only a few.

シンポジウム＜東南アジア史における先住民と移住民＞報告要旨

趣旨説明――――――玉置 泰明

本テーマの背景は「国際先住民年」である。しかし東南アジアにおける「先住民」はアメリカ大陸や豪大陸の場合のように自明の存在ではない。現在の東南アジア各国でも、誰を先住民とするかについて明確な合意（政府のだけではなく、研究者の間でも）が存在するとは言いがたい。さらに、歴史的に見れば東南アジアの各民族は、ある時点では移住民として、また別の時点では先住民として存在してきたと言えるだろう。実体あるいは概念としての特定の「民族」自体が、諸集団の移住や離合集散の繰り返しの中で形成されてきたと言う方がいいかも知れない。それゆえ我々が「東南アジア史における先住民」と言う場合、「国際先住民年」が対象とするような現代的意味での「先住民」だけではなく、歴史上の特定の時点での「先住民」をも対象とすべきであろう。様々な地域、様々な時点での先住民—移住民関係こそが、東南アジア史のダイナミズムを作ってきたという言い方も可能であろう。

例えばフィリピンの場合、スペイン人が到来した時点での「インディオ」すなわちすべての土着民族を「先住民」と考えることができる。ずっと遡って、先マレー系民族（ネグリート）が住んでいた群島にマレー系諸民族がやってきた時の関係も、先住民と移住民という図式でとらえることが可能である。それは諸集団が群島の各地に移動して定着していく過程の中でも繰り返しあったことであり、マレー系諸民族同士の関係についても言える、下っては、キリスト教徒が南部フィリピンに移住した際の「先住」のムスリム諸民族との関係も見落とせない。

また、「先住民」は「先住少数民族」のみならず「先住多数民族」をもふくむ。東南アジア史ではとくに、華僑・華人と先住諸民族の関係が重要なことは言うまでもない。

こうした様々なレベルでの先住民—移住民関係を「共生と摩擦」という視点からとりあげることによって、東南アジア史の新しい側面に光を当てることができれば幸いである。

ヨーロッパ人とインディアス――――――生田 滋

コロンブスに始まるヨーロッパ人のインディアス、すなわち新大陸進出は、厳しい、

other things else. Also, the adaptation of this "imported" knowledge, which is not much different from other "foreign goods," lacks solid harmonized continuity and strong internal criticism. This, and some more other factors, seem to be unable to help create originality, development and real value for the Thai study scholarship in modern Thailand, except only a few.

シンポジウム＜東南アジア史における先住民と移住民＞報告要旨

趣旨説明――――――玉置 泰明

本テーマの背景は「国際先住民年」である。しかし東南アジアにおける「先住民」はアメリカ大陸や豪大陸の場合のように自明の存在ではない。現在の東南アジア各国でも、誰を先住民とするかについて明確な合意（政府のだけではなく、研究者の間でも）が存在するとは言いがたい。さらに、歴史的に見れば東南アジアの各民族は、ある時点では移住民として、また別の時点では先住民として存在してきたと言えるだろう。実体あるいは概念としての特定の「民族」自体が、諸集団の移住や離合集散の繰り返しの中で形成されてきたと言う方がいいかも知れない。それゆえ我々が「東南アジア史における先住民」と言う場合、「国際先住民年」が対象とするような現代的意味での「先住民」だけではなく、歴史上の特定の時点での「先住民」をも対象とすべきであろう。様々な地域、様々な時点での先住民—移住民関係こそが、東南アジア史のダイナミズムを作ってきたという言い方も可能であろう。

例えばフィリピンの場合、スペイン人が到来した時点での「インディオ」すなわちすべての土着民族を「先住民」と考えることができる。ずっと遡って、先マレー系民族（ネグリート）が住んでいた群島にマレー系諸民族がやってきた時の関係も、先住民と移住民という図式でとらえることが可能である。それは諸集団が群島の各地に移動して定着していく過程の中でも繰り返しあったことであり、マレー系諸民族同士の関係についても言える、下っては、キリスト教徒が南部フィリピンに移住した際の「先住」のムスリム諸民族との関係も見落とせない。

また、「先住民」は「先住少数民族」のみならず「先住多数民族」をもふくむ。東南アジア史ではとくに、華僑・華人と先住諸民族の関係が重要なことは言うまでもない。

こうした様々なレベルでの先住民—移住民関係を「共生と摩擦」という視点からとりあげることによって、東南アジア史の新しい側面に光を当てることができれば幸いである。

ヨーロッパ人とインディアス――――――生田 滋

コロンブスに始まるヨーロッパ人のインディアス、すなわち新大陸進出は、厳しい、

あるいは荒廃した生態系のなかで生活していたかれらが発展させてきた当時のヨーロッパ文明そのものの持っていたさまざまな要素がはばかることなく發揮された行為であった。とくにキリスト教思想が重要な役割を果たした。コロンブスの行為そのものも、当時の彼の思想的立場に即して考えると、「地上の楽園」すなわち「エデンの園」に到達するためであったし、また彼に見られる黄金へのあくなき欲求も実は聖地エルサレムをイスラム教徒の手から奪還するための軍資金を調達するためであった。

「異教徒」の国家を征服し、文化を徹底的に破壊し、そこにキリスト教の信仰を移植し、キリスト教帝国スペインの支配権を確立することは当然のこととされた。この後さかんに行われたキリスト教の布教活動も、その本来の目的は、近づきつつある最後の審判の日に「未信者」がそのために地獄に墮ちることからかれらを救うためであった。こうしたキリスト教的な発想はヨーロッパ人の世界各地への進出の強烈な動機となっている。これはつまり当時イスラム世界の圧迫を受けていたヨーロッパ世界の絶望と危機感が裏返しの形で強烈に表現されたことにはかならない。

もちろんヨーロッパ人の新大陸進出は現地の住民、すなわちインディオスにとって悲劇的な衝撃を与えた。とくに伝染病の蔓延はかれらの人口を激減させ、かれらの社会を崩壊に導いた場合が多い。しかし最近の研究によって明らかにされつつあるようには、新大陸の各地に住むインディオス、とくに中南米の高原地帯で高度の農業文明を築いていたインカ、アステカ帝国の住民はよくその衝撃に耐え、それを吸収し、かれらの社会と文化が崩壊することを防いだ。こうした観点をさらに推し進め、ヨーロッパ人の新大陸進出の実態をさらに客観的に把握する必要がある。

マレーシアにおける先住民概念——富沢 寿男

国際先住民年に運動して学会やマスメディア、市民運動において世界の先住民問題にふれる議論が近年高まっているにもかかわらず、民族概念としての先住民を議論の出発点に据えたものは意外なほど少ない。当該地域の人々が認識する先住民概念の外延を吟味することは、その人々の歴史認識とこれに規定される歴史自体の動的過程を把握する上でも有力な着眼点となると思われるにもかかわらずである。

現代マレーシアの先住民概念として半島部ではオラン・アスリ（「先住民」）が挙げられる。それは公式の分類では、より古い先住民であるネグリトから、より新しいセノイを経て、もっとも新しいプロト・マレーまでを含む。一方、Benjamin (1985) はこのプロト・マレーに対応する先住マレー（ムラユ・アスリ）とイスラーム化したマレー（ムラユ）との連続性を強調し、セマン（ネグリト）、セノイ、広義のマレーを一括して「近年の土着文化」（recent indigenous cultures）としている。彼自身のこの学術的立場からの主張は、強い政治性が指摘されるブミプトラ（「土地の子」）概念と認識上は結果として符合する。ブミプトラは周知のとおり、きわめて近年の来住者である華人やインド人等を排除する概念であり、オラン・アスリはブミプトラの中のマレー・ムスリムの残余概念の性格が強い。ところで現在のマレーシアの国

あるいは荒廃した生態系のなかで生活していたかれらが発展させてきた当時のヨーロッパ文明そのものの持っていたさまざまな要素がはばかることなく發揮された行為であった。とくにキリスト教思想が重要な役割を果たした。コロンブスの行為そのものも、当時の彼の思想的立場に即して考えると、「地上の楽園」すなわち「エデンの園」に到達するためであったし、また彼に見られる黄金へのあくなき欲求も実は聖地エルサレムをイスラム教徒の手から奪還するための軍資金を調達するためであった。

「異教徒」の国家を征服し、文化を徹底的に破壊し、そこにキリスト教の信仰を移植し、キリスト教帝国スペインの支配権を確立することは当然のこととされた。この後さかんに行われたキリスト教の布教活動も、その本来の目的は、近づきつつある最後の審判の日に「未信者」がそのために地獄に墮ちることからかれらを救うためであった。こうしたキリスト教的な発想はヨーロッパ人の世界各地への進出の強烈な動機となっている。これはつまり当時イスラム世界の圧迫を受けていたヨーロッパ世界の絶望と危機感が裏返しの形で強烈に表現されたことにはかならない。

もちろんヨーロッパ人の新大陸進出は現地の住民、すなわちインディオスにとって悲劇的な衝撃を与えた。とくに伝染病の蔓延はかれらの人口を激減させ、かれらの社会を崩壊に導いた場合が多い。しかし最近の研究によって明らかにされつつあるように、新大陸の各地に住むインディオス、とくに中南米の高原地帯で高度の農業文明を築いていたインカ、アステカ帝国の住民はよくその衝撃に耐え、それを吸収し、かれらの社会と文化が崩壊することを防いだ。こうした観点をさらに推し進め、ヨーロッパ人の新大陸進出の実態をさらに客観的に把握する必要がある。

マレーシアにおける先住民概念——富沢 寿男

国際先住民年に運動して学会やマスメディア、市民運動において世界の先住民問題にふれる議論が近年高まっているにもかかわらず、民族概念としての先住民を議論の出発点に据えたものは意外なほど少ない。当該地域の人々が認識する先住民概念の外延を吟味することは、その人々の歴史認識とこれに規定される歴史自体の動的過程を把握する上でも有力な着眼点となると思われるにもかかわらずである。

現代マレーシアの先住民概念として半島部ではオラン・アスリ（「先住民」）が挙げられる。それは公式の分類では、より古い先住民であるネグリトから、より新しいセノイを経て、もっとも新しいプロト・マレーまでを含む。一方、Benjamin (1985) はこのプロト・マレーに対応する先住マレー（ムラユ・アスリ）とイスラーム化したマレー（ムラユ）との連続性を強調し、セマン（ネグリト）、セノイ、広義のマレーを一括して「近年の土着文化」（recent indigenous cultures）としている。彼自身のこの学術的立場からの主張は、強い政治性が指摘されるブミプトラ（「土地の子」）概念と認識上は結果として符合する。ブミプトラは周知のとおり、きわめて近年の来住者である華人やインド人等を排除する概念であり、オラン・アスリはブミプトラの中のマレー・ムスリムの残余概念の性格が強い。ところで現在のマレーシアの国

家体制成立以前の半島部の地方史の脈絡においても、上記と同様の先住民概念がミクロのレベルで展開していることが注目される。たとえば現在のヌグリ・スンビラン州は、かつて小国の集合であったが、多くの小国では入植者としてのミナンカバウ系のマレー・ムスリム人口が増加するとともに、ビドゥアンダという先住民を象徴する社会範疇が首長の権威の母胎となった。ビドゥアンダは起原としては非ムスリムの先住民を含意しながらも、イスラーム化することでムスリムの政治・社会構造に包摂されていった先住民をも含む、ムスリム側にとって戦略的な曖昧性を帯びた概念として機能してきた。こうしてヌグリ・スンビランという地方から、今日のマレーシア連邦のあり方に至る過程を再考すると、ビドゥアンダからオラン・アスリ、さらに包括的なブミプトラという一連の先住民概念が、〈入れ子〉の構造を示しながら、いずれも本質的な政治性と相対性によって伸縮自在の様相を提示してきたことが理解できる。

東南アジアにおけるジャワ移民――――――染谷 臣道

1815年におけるジャワ島（マドゥラ島を含む）の人口は450万弱であった。しかし1905年には3000万人弱と90年間におよそ6.6倍に膨れ上った。こうした人口の急増から起こる諸問題を解決するため、オランダ政府は1905年にジャワ農民の外島移住政策を始めた。私は1988年から3年にわたってランポンにある初期の開拓村を文部省科学研究費の助成を受けて調査した。また、1992年と93年にはマレーシア・サバ州（北ボルネオ）に移住したジャワ人の適応過程について文部省科学研究費の助成で調査を実施した。北ボルネオにはここが英國の勅許会社の支配下にあった当時、ゴム園の契約労働者としてたくさんのジャワ人が働き、第二次世界大戦中は日本軍によって強制連行されたジャワ人労働者が働いていた。前者の多くはジャワに帰ったが、後者の多くは戦後も故郷に帰れず、異郷の地で生きていかねばならなかった。私が会ったジャワ人はそういう人たちである。これまでの調査から、彼らもまた、ジャワの同胞たちと同じように、大きく二つの型に分かれる。第一の型は、内部志向的で、個人（利己）主義的、自主独立的、合理主義的、現実主義的、非運命主義的、非権威主義的な核心（近代）主義者で、第二の型は他人志向的で、社会主義的、精神主義的、神秘主義的、運命主義的、権威主義的な伝統主義者である。スマトラ南部に移住したジャワ人たちと先住民の関係はおおむね良好であったといってよい。原野への開拓移住であったため土地所有をめぐるいざこざもあまり聞かない。むしろジャワ化（javanisasi）というジャワとランポンの間の文化的落差から起こる一方的影響が注目される。サバ州のジャワ人は「日本に捨てられたごみ」と蔑まれるなかで、ジャワ料理店の経営などで成功した人々と、ゴム園労働者のように過酷な労働条件と貧困そして新しい情報から取り残されてきた人々に分かれる。ただ、いずれも先住民の女性と結婚し、子供をもうけ、現地人化していることが注目される。

家体制成立以前の半島部の地方史の脈絡においても、上記と同様の先住民概念がミクロのレベルで展開していることが注目される。たとえば現在のヌグリ・スンビラン州は、かつて小国の集合であったが、多くの小国では入植者としてのミナンカバウ系のマレー・ムスリム人口が増加するとともに、ビドゥアンダという先住民を象徴する社会範疇が首長の権威の母胎となった。ビドゥアンダは起原としては非ムスリムの先住民を含意しながらも、イスラーム化することでムスリムの政治・社会構造に包摂されていった先住民をも含む、ムスリム側にとって戦略的な曖昧性を帯びた概念として機能してきた。こうしてヌグリ・スンビランという地方から、今日のマレーシア連邦のあり方に至る過程を再考すると、ビドゥアンダからオラン・アスリ、さらに包括的なブミプトラという一連の先住民概念が、〈入れ子〉の構造を示しながら、いずれも本質的な政治性と相対性によって伸縮自在の様相を提示してきたことが理解できる。

東南アジアにおけるジャワ移民――――――染谷 臣道

1815年におけるジャワ島（マドゥラ島を含む）の人口は450万弱であった。しかし1905年には3000万人弱と90年間におよそ6.6倍に膨れ上った。こうした人口の急増から起こる諸問題を解決するため、オランダ政府は1905年にジャワ農民の外島移住政策を始めた。私は1988年から3年にわたってランポンにある初期の開拓村を文部省科学研究費の助成を受けて調査した。また、1992年と93年にはマレーシア・サバ州（北ボルネオ）に移住したジャワ人の適応過程について文部省科学研究費の助成で調査を実施した。北ボルネオにはここが英國の勅許会社の支配下にあった当時、ゴム園の契約労働者としてたくさんのジャワ人が働き、第二次世界大戦中は日本軍によって強制連行されたジャワ人労働者が働いていた。前者の多くはジャワに帰ったが、後者の多くは戦後も故郷に帰れず、異郷の地で生きていかねばならなかった。私が会ったジャワ人はそういう人たちである。これまでの調査から、彼らもまた、ジャワの同胞たちと同じように、大きく二つの型に分かれる。第一の型は、内部志向的で、個人（利己）主義的、自主独立的、合理主義的、現実主義的、非運命主義的、非権威主義的な核心（近代）主義者で、第二の型は他人志向的で、社会主義的、精神主義的、神秘主義的、運命主義的、権威主義的な伝統主義者である。スマトラ南部に移住したジャワ人たちと先住民の関係はおおむね良好であったといってよい。原野への開拓移住であったため土地所有をめぐるいざこざもあまり聞かない。むしろジャワ化（javanisasi）というジャワとランポンの間の文化的落差から起こる一方的影響が注目される。サバ州のジャワ人は「日本に捨てられたごみ」と蔑まれるなかで、ジャワ料理店の経営などで成功した人々と、ゴム園労働者のように過酷な労働条件と貧困そして新しい情報から取り残されてきた人々に分かれる。ただ、いずれも先住民の女性と結婚し、子供をもうけ、現地人化していることが注目される。

共生の構図 — ブギス・マカッサル人の移住・交易活動から——伊藤 真

本報告では、1988年8月から10月にかけて筆者がスマトラのジャンビ州および南スマトラ州で行ったブギスの移住に関する現地調査（文部省国際学術研究『インドネシア移住開拓民における生活世界の形成過程』による）、および従来の諸研究などに依拠しつつ、主として次の2点をとりあげる。

(1)現在の移住開拓地における共生 — ジャンビの例

(2)過去における共生 — 漂海民との関係

ブギス・マカッサル人は、古くから交易、遠征などを通じてインドネシアは言うに及ばず東南アジア島嶼部各地にコロニーを形成したことで知られる。また、今日ではスマトラやカリマンタンの開拓地への自発的な入植者として、南スラウェシにおけるやり方とは全く異なる耕法で新しい生活空間を切りひらいていることで知られる。そうした彼らの積極的な生活様式は、従来より彼らに与えられた奴隸商人、戦士、勇敢な航海者といったイメージと重なりあって、「先住民」との摩擦を予想しがちであるが、実態は必ずしもそうではない。移住開拓地においては、彼ら独特の環境適応により、むしろ棲み分けといった方が適当な共生関係が見られる。他方、過去における彼らの海外進出には漂海民との間に一種の協業関係があったことが考えられる。こうした諸事実は、ブギス人に代表されるような移住民と「先住民」との接触が、必ずしも抑圧・被抑圧的関係を生み出すものではなかったこと、力関係以外の要因による共生のあり方が存在したことを示すものであろう。

タイ族の移住と先住民 — 「先住民／移住民」から

「山地民／平地民」へ——馬場 雄司

北部タイを中心として分布するタイ系民族は、「移住によって先住民を征服・吸収して王国を確立した」という伝承をもっている。ここには、「先住民」に対する「移住民＝征服民」という関係がみられる。一方、現在、タイという国民国家の枠組みでは、「山地民」に対する「平地民＝タイ人」の優位という図式が一般に認識されている。ここでは北部タイを中心に、タイ系諸王国形成に際して認識される「先住民／移住民＝征服民」関係と、国民国家形成後に認識されるようになる「山地民／平地民」関係という、二つの枠組みを比較し、その関連について検討してみたい。

前近代におけるタイ系諸王国では、「仏教的な王国的秩序」の外部にあるものとして、モン・クメール系の民族が未開の先住民として想像されており、それは、北タイにかつて存在した、ランナー王国の王権に関わる儀礼などに象徴的に表される。これに対し、タイ国という「国民国家」では、「国家的秩序」の外部にあるものとして、「山地民」が想像されている。阿片、共産主義など国家に不安材料を与えるという理由で注目された山地に住む諸民族が、1959年以降、「山地民」と一元的に公称されるようになるのである。ここには、「先住民／征服民」＝「野蛮／文明」の図式（I）から、「山地民／平地民」＝「野蛮／文明」の図式（II）への転換が見られる。

共生の構図 — ブギス・マカッサル人の移住・交易活動から——伊藤 真

本報告では、1988年8月から10月にかけて筆者がスマトラのジャンビ州および南スマトラ州で行ったブギスの移住に関する現地調査（文部省国際学術研究『インドネシア移住開拓民における生活世界の形成過程』による）、および従来の諸研究などに依拠しつつ、主として次の2点をとりあげる。

(1)現在の移住開拓地における共生 — ジャンビの例

(2)過去における共生 — 漂海民との関係

ブギス・マカッサル人は、古くから交易、遠征などを通じてインドネシアは言うに及ばず東南アジア島嶼部各地にコロニーを形成したことで知られる。また、今日ではスマトラやカリマンタンの開拓地への自発的な入植者として、南スラウェシにおけるやり方とは全く異なる耕法で新しい生活空間を切りひらいていることで知られる。そうした彼らの積極的な生活様式は、従来より彼らに与えられた奴隸商人、戦士、勇敢な航海者といったイメージと重なりあって、「先住民」との摩擦を予想しがちであるが、実態は必ずしもそうではない。移住開拓地においては、彼ら独特の環境適応により、むしろ棲み分けといった方が適当な共生関係が見られる。他方、過去における彼らの海外進出には漂海民との間に一種の協業関係があったことが考えられる。こうした諸事実は、ブギス人に代表されるような移住民と「先住民」との接触が、必ずしも抑圧・被抑圧的関係を生み出すものではなかったこと、力関係以外の要因による共生のあり方が存在したことを示すものであろう。

タイ族の移住と先住民 — 「先住民／移住民」から

「山地民／平地民」へ——馬場 雄司

北部タイを中心として分布するタイ系民族は、「移住によって先住民を征服・吸収して王国を確立した」という伝承をもっている。ここには、「先住民」に対する「移住民＝征服民」という関係がみられる。一方、現在、タイという国民国家の枠組みでは、「山地民」に対する「平地民＝タイ人」の優位という図式が一般に認識されている。ここでは北部タイを中心に、タイ系諸王国形成に際して認識される「先住民／移住民＝征服民」関係と、国民国家形成後に認識されるようになる「山地民／平地民」関係という、二つの枠組みを比較し、その関連について検討してみたい。

前近代におけるタイ系諸王国では、「仏教的な王国的秩序」の外部にあるものとして、モン・クメール系の民族が未開の先住民として想像されており、それは、北タイにかつて存在した、ランナー王国の王権に関わる儀礼などに象徴的に表される。これに対し、タイ国という「国民国家」では、「国家的秩序」の外部にあるものとして、「山地民」が想像されている。阿片、共産主義など国家に不安材料を与えるという理由で注目された山地に住む諸民族が、1959年以降、「山地民」と一元的に公称されるようになるのである。ここには、「先住民／征服民」＝「野蛮／文明」の図式(I)から、「山地民／平地民」＝「野蛮／文明」の図式(II)への転換が見られる。

IからIIへの転換がなされる前提としては、19世紀を中心とした時期における、様々な民族の移住と、彼らの、タイという「国民国家」への包摂という問題がある。この時期には、戦争捕虜として入植したタイ系の諸民族や様々な山地に住む諸民族の北タイへの移住がある。前近代には、「モン・クメール系の先住民対タイ系の征服民」という関係が主要であったが、近代における「国民国家」は、その形成前夜に移住した多くの民族を包摂し、「山地民／平地民」という関係に再編成していったのである。

資料・研究短報

国際アジア歴史学者会議（IAHA）東京大会について

寺田 勇文（IAHA事務局）

1994年9月5日から9日まで東京都千代田区の上智大学を会場として、国際アジア歴史学者会議の東京大会が開かれる。この学会は英語では International Association of Historians of Asia、略して IAHA（イアハ）として知られており、今回その13回目の大会が初めて日本で開かれることになった。

IAHAは東南アジアとその周辺地域の歴史学および隣接研究分野の最新の研究成果を議論、検証する国際学会として創立され、1960年にマニラで第1回大会が開催された。それ以後、2～3年毎に、台北（62年）、香港（64年）、クアラルンプル（68年）、マニラ（71年）、ジョクジャカルタ（74年）、バンコク（77年）、クアラルンプル（80年）、マニラ（83年）、シンガポール（86年）、コロンボ（88年）、香港（91年）で開催されており、日本からも毎回10～20名が出席している。

また、これまでに山本達郎氏（現東京大学名誉教授）、故永積昭氏、石井米雄氏（現上智大学教授）が副会長として学会運営の任にあたられており、91年の香港大会では石井氏が会長に選出されている。今回の東京大会は、山本達郎名誉委員長、市川健二郎委員長を代表とする東京大会組織委員会を中心に準備が進められており、プログラムの概要は次の通りである。

会期は、1994年9月5日（月）から9日（金）までの5日間。今回の大会では、とくに下記の10のテーマを中心として研究発表を募集しているが、それ以外の分野での研究発表も大いに歓迎している。10のテーマとは、

古代東南アジアにおけるセトルメントとネットワーク

南海における陶磁貿易

18世紀の東南アジア世界

植民地体制下における東南アジアの社会文化変容

第二次世界大戦と東南アジア

東南アジアにおける地域・国民統合

第二次世界大戦後の東南アジアにおける経済発展

IからIIへの転換がなされる前提としては、19世紀を中心とした時期における、様々な民族の移住と、彼らの、タイという「国民国家」への包摂という問題がある。この時期には、戦争捕虜として入植したタイ系の諸民族や様々な山地に住む諸民族の北タイへの移住がある。前近代には、「モン・クメール系の先住民対タイ系の征服民」という関係が主要であったが、近代における「国民国家」は、その形成前夜に移住した多くの民族を包摂し、「山地民／平地民」という関係に再編成していったのである。

資料・研究短報

国際アジア歴史学者会議（IAHA）東京大会について

寺田 勇文（IAHA事務局）

1994年9月5日から9日まで東京都千代田区の上智大学を会場として、国際アジア歴史学者会議の東京大会が開かれる。この学会は英語では International Association of Historians of Asia、略して IAHA（イアハ）として知られており、今回その13回目の大会が初めて日本で開かれることになった。

IAHAは東南アジアとその周辺地域の歴史学および隣接研究分野の最新の研究成果を議論、検証する国際学会として創立され、1960年にマニラで第1回大会が開催された。それ以後、2～3年毎に、台北（62年）、香港（64年）、クアラルンプル（68年）、マニラ（71年）、ジョクジャカルタ（74年）、バンコク（77年）、クアラルンプル（80年）、マニラ（83年）、シンガポール（86年）、コロンボ（88年）、香港（91年）で開催されており、日本からも毎回10～20名が出席している。

また、これまでに山本達郎氏（現東京大学名誉教授）、故永積昭氏、石井米雄氏（現上智大学教授）が副会長として学会運営の任にあたられており、91年の香港大会では石井氏が会長に選出されている。今回の東京大会は、山本達郎名誉委員長、市川健二郎委員長を代表とする東京大会組織委員会を中心に準備が進められており、プログラムの概要は次の通りである。

会期は、1994年9月5日（月）から9日（金）までの5日間。今回の大会では、とくに下記の10のテーマを中心として研究発表を募集しているが、それ以外の分野での研究発表も大いに歓迎している。10のテーマとは、

古代東南アジアにおけるセトルメントとネットワーク

南海における陶磁貿易

18世紀の東南アジア世界

植民地体制下における東南アジアの社会文化変容

第二次世界大戦と東南アジア

東南アジアにおける地域・国民統合

第二次世界大戦後の東南アジアにおける経済発展

東南アジア・南アジアにおけるキリスト教
アジア史における地方史の諸問題
アジアのなかの日本
である。

会期中には、上記のテーマ別の分科会のほかに、特別講演、東南アジア史研究の現状を議論するコロキウムなど多彩なプログラムが予定されている。海外よりの参加者は150名近くにのぼるものと期待される。

大会への参加をご希望の方は、登録書類を下記の大会事務局までご請求ください。

〒171 千代田区紀尾井町7-1 上智大学アジア文化研究所 気付 IAHA 東京大会事務局
電話 03-3238-4388 (火木金の午後) ファクス 03-3238-3690

バジャウ研究の動向————赤嶺 淳 (フィリピン大学)

1993年11月22日より25日までインドネシア科学院 (LIPI) 主催の第1回国際バジャウセミナーがジャカルタで開かれた。開催国のインドネシアから50名を超える研究者、政府関係者が参加するほか、海外から日本(19)、オーストラリア(5)、フランス(3)、ドイツ(5)、マレーシア(8)、フィリピン(1)、アメリカ(1)の参加があった。また、スラウェシ(インドネシア)やサバ(マレーシア)、スル(フィリピン)からバジャウ人も参加した。

バジャウの人々は漂海民とも呼ばれる。元来彼らは、家族単位で家舟を持ち、その舟上で生活を営んできた。現在では定着した生活を営むバジャウ人も多いが、移動しながら漁を続けているバジャウ人もいる。バジャウ人は、マレー海域世界一帯で生活しているが、中でもマレーシアのサバ州やジョホール州、インドネシアのスラウェシ島、フィリピンのスル諸島に多く生活している。

会議にあわせてジャカルタの国立博物館では、バジャウ展が開かれた。会場にはインドネシア・バジャウの写真・ビデオや家船、バジャウの生活用具が多数展示されていた。このような大がかりな展示が実施された背景には、インドネシア政府が進めているバジャウの定住化政策・近代化政策があるという。それを裏付けるように、インドネシア政府関係者からは、バジャウの近代化政策に関する発表もあった。

会議では別表のごとく多種多様な研究発表がなされた。特に環境問題や文化・社会変容に関する発表がめだった。現地調査に基づいたもののが多かったのも特徴であろう。また、インドネシア、マレーシア、フィリピンからバジャウ人が参加し会議を盛り上げた。

スル・バジャウの言語に関心があって、私はセミナーに参加した。マレー海域世界のバジャウと称される人々が同じことばを話しているのか、否かは、興味深い問題だ。残念ながら言語を扱った論文はなかった。私が感じた限りでは、サバ・バジャウとスル・バジャウとでは、コミュニケーションに問題はなさそうだ。しかし、スル・バジャウとインドネシア・バジャウは、共有する単語があるので何とか理解できる程度だ。

東南アジア・南アジアにおけるキリスト教
アジア史における地方史の諸問題
アジアのなかの日本
である。

会期中には、上記のテーマ別の分科会のほかに、特別講演、東南アジア史研究の現状を議論するコロキウムなど多彩なプログラムが予定されている。海外よりの参加者は150名近くにのぼるものと期待される。

大会への参加をご希望の方は、登録書類を下記の大会事務局までご請求ください。

〒171 千代田区紀尾井町7-1 上智大学アジア文化研究所 気付 IAHA 東京大会事務局
電話 03-3238-4388 (火木金の午後) ファクス 03-3238-3690

バジャウ研究の動向————赤嶺 淳 (フィリピン大学)

1993年11月22日より25日までインドネシア科学院 (LIPI) 主催の第1回国際バジャウセミナーがジャカルタで開かれた。開催国のインドネシアから50名を超える研究者、政府関係者が参加するほか、海外から日本(19)、オーストラリア(5)、フランス(3)、ドイツ(5)、マレーシア(8)、フィリピン(1)、アメリカ(1)の参加があった。また、スラウェシ(インドネシア)やサバ(マレーシア)、スル(フィリピン)からバジャウ人も参加した。

バジャウの人々は漂海民とも呼ばれる。元来彼らは、家族単位で家舟を持ち、その舟上で生活を営んできた。現在では定着した生活を営むバジャウ人も多いが、移動しながら漁を続けているバジャウ人もいる。バジャウ人は、マレー海域世界一帯で生活しているが、中でもマレーシアのサバ州やジョホール州、インドネシアのスラウェシ島、フィリピンのスル諸島に多く生活している。

会議にあわせてジャカルタの国立博物館では、バジャウ展が開かれた。会場にはインドネシア・バジャウの写真・ビデオや家船、バジャウの生活用具が多数展示されていた。このような大がかりな展示が実施された背景には、インドネシア政府が進めているバジャウの定住化政策・近代化政策があるという。それを裏付けるように、インドネシア政府関係者からは、バジャウの近代化政策に関する発表もあった。

会議では別表のごとく多種多様な研究発表がなされた。特に環境問題や文化・社会変容に関する発表がめだった。現地調査に基づいたもののが多かったのも特徴であろう。また、インドネシア、マレーシア、フィリピンからバジャウ人が参加し会議を盛り上げた。

スル・バジャウの言語に関心があって、私はセミナーに参加した。マレー海域世界のバジャウと称される人々が同じことばを話しているのか、否かは、興味深い問題だ。残念ながら言語を扱った論文はなかった。私が感じた限りでは、サバ・バジャウとスル・バジャウとでは、コミュニケーションに問題はなさそうだ。しかし、スル・バジャウとインドネシア・バジャウは、共有する単語があるので何とか理解できる程度だ。

ビジネスミーティングにおいて、プロシーディングの出版が決定した。また、今後も情報交換を積極的に行うために各國持ち回りで事務局を設定し、年1回のニュースレターの発行が決定された。本年度の事務局は京都大学がつとめ、LIPIのLapian氏が責任者をつとめることになった。

なおセミナーで発表された24本の論文のタイトルは以下の通りである。

Session I, Discussion Leader: Anugerah Nontji.

1. Tomoya Akimichi (秋道智彌). "Coral Reef Foragers in Transition: Nomadism, Sedentarism and Ethno-Networks".
2. Rili Hawari Djohani, Ramli Malik and Muslimin. "The Bajau People and Their Marine Environment in Sulawesi and Sumbawa".
3. Kurt Tauchmann. "Ecological Adaptation and Economic Oscillation: Niches of Maritime Nomads in Southeast Asia".

Session II, Discussion Leader: James J. Fox.

4. Paul Clark. "Small Boat Building at Tungkalang: A Bajau Settlement in the Southern Sulu Sea, Philippines".
5. Hendro Sangkoyo. "Between Moving Ashore and Living Dangerously: Towards a Sound Habitat for the Southeast Asian Sea Tribes".
6. W. J. Waworoentoe. "Growth and Change of Coastal and Island Communities and Settlements in Eastern Indonesia".

Session III, Discussion Leader: Christian Pelas.

7. Bruno Bottignolo. "Why They Call Themselves Umboh".
8. Zainal Kling. "The Bajau of Sabah, Malaysia: Adat as Indicator of Social Structure"
9. Clifford Sather. "Ethnicity and Political History: The Bajau Laut Community of Southeastern Sabah (Malaysia)".

Session IV, Discussion Leader: Kurt Tauchmann.

10. Lioba Lenhart. "Orang Suku Laut: Concepts of the Ethnic Self-The Construction of Basic and Situational Identities".
11. Judistira Garna. "The Orang Laut of Natuna Island".
12. Christian Pelras. "A Few Complementary Notes on Aquatic Populations in South Sulawesi and South Malaya".

Session V, Discussion Leader: Clifford Sather.

13. Esther Velthoen and Gregory L. Acciaioli. "Fluctuating States, Mobile Populations: Shifting Relations of Bajo to Local Rulers and Bugis Traders in Colonial Eastern Sulawesi".
14. Rustan E. Tamburaka and La Ode Muharam. "The Life Style and Attitudes

of the Bajau Fishing Community in Southeast Sulawesi".

15. P. G. Spillett. "A Race Apart: Notes on the Sama Bajo People of Sulawesi, Nusa Tenggara and Northern Sulawesi".

Session VI, Discussion Leader: Tomoya Akimichi.

16. Ali M. A. Rachman. "Tribal Information Capture and Environmental Knowledge".

17. Sukotjo Adisukresno. "The Bajau as Fishermen Scattered Over the Indonesian Archipelago".

18. Takefumi Terada (寺田勇文). "The Bajaus in Sulu: The Problem of National Integration".

19. John Darling. "'East Monsoon' a Work in Progress; Video screening on a film about the Sama-Bajau".

Session VII, Discussion Leader: W.J. Waworoentoe.

20. Edy Mantjoro. "Socio Economic Life of Bajau Communities in North Sulawesi".

21. Fadjar Ibnu, Ary Wahyono, and Tantyo Bangun. "Bajo: Problems of Cultural Acculturation in North Sulawesi".

22. Ahmad Mattulada. "The Bajau of Southeast Sulawesi".

Session VIII, Discussion Leader: Takefumi Terada.

23. James J. Fox. "Bajau Voyages to the Timor Area, The Ashmore Reef and Australia".

24. Bu V.E. Wilson. "Mare Nullius in Australia and Customary Marine Tenure in South East Sulawesi: Work in Progress".

バンテン遺跡出土陶磁片共同調査の新資料

——坂井 隆（群馬県埋蔵文化財調査事業団）

インドネシアの西部ジャワのバンテンは、陶磁貿易の重要な中継地でもあり、特にバンテン・ラーマ遺跡では、主に16世紀から18世紀にかけての多彩な陶磁器が大量に出土している。

最大10万人の人口のあった東西約2km、南北1kmのこの港市遺跡は、1976年以来インドネシア国立考古学研究センターなどにより発掘調査が続けられている。また王宮跡などを中心とする主な地点では復元整備がなされ、その過程で出土した膨大な陶磁片は大部分が未整理のままバンテン遺跡博物館に収蔵されている。

インドネシア側との共同研究を目的とする我々「バンテン遺跡研究会」（青柳洋治代表）は、1993年12月にインドネシア国立考古学研究センターと共に、それらの陶磁

of the Bajau Fishing Community in Southeast Sulawesi".

15. P. G. Spillett. "A Race Apart: Notes on the Sama Bajo People of Sulawesi, Nusa Tenggara and Northern Sulawesi".

Session VI, Discussion Leader: Tomoya Akimichi.

16. Ali M. A. Rachman. "Tribal Information Capture and Environmental Knowledge".

17. Sukotjo Adisukresno. "The Bajau as Fishermen Scattered Over the Indonesian Archipelago".

18. Takefumi Terada (寺田勇文). "The Bajaus in Sulu: The Problem of National Integration".

19. John Darling. "'East Monsoon' a Work in Progress; Video screening on a film about the Sama-Bajau".

Session VII, Discussion Leader: W.J. Waworoentoe.

20. Edy Mantjoro. "Socio Economic Life of Bajau Communities in North Sulawesi".

21. Fadjar Ibnu, Ary Wahyono, and Tantyo Bangun. "Bajo: Problems of Cultural Acculturation in North Sulawesi".

22. Ahmad Mattulada. "The Bajau of Southeast Sulawesi".

Session VIII, Discussion Leader: Takefumi Terada.

23. James J. Fox. "Bajau Voyages to the Timor Area, The Ashmore Reef and Australia".

24. Bu V.E. Wilson. "Mare Nullius in Australia and Customary Marine Tenure in South East Sulawesi: Work in Progress".

バンテン遺跡出土陶磁片共同調査の新資料

——坂井 隆（群馬県埋蔵文化財調査事業団）

インドネシアの西部ジャワのバンテンは、陶磁貿易の重要な中継地でもあり、特にバンテン・ラーマ遺跡では、主に16世紀から18世紀にかけての多彩な陶磁器が大量に出土している。

最大10万人の人口のあった東西約2km、南北1kmのこの港市遺跡は、1976年以来インドネシア国立考古学研究センターなどにより発掘調査が続けられている。また王宮跡などを中心とする主な地点では復元整備がなされ、その過程で出土した膨大な陶磁片は大部分が未整理のままバンテン遺跡博物館に収蔵されている。

インドネシア側との共同研究を目的とする我々「バンテン遺跡研究会」（青柳洋治代表）は、1993年12月にインドネシア国立考古学研究センターと共に、それらの陶磁

片の分類整理活動を16日間行った。

インドネシア側は国立考古学研究センター以外に西部ジャワ文化財管理事務所、ジャカルタ国立博物館、インドネシア大学の4研究機関から6名の研究者が、また日本側は、筆者と共に大橋康二（佐賀県立九州陶磁文化館）と扇浦正義（長崎市教育委員会）であり、全体で延べ20人が参加した。

調査陶磁片は、主にスロソワン王宮地区から出土したものである。時間的制約から調査できなかったベトナム、タイ、ヨーロッパなどを除き、これまで漠然としか捉えられていなかった破片総数約10～20万点の中国陶磁および日本陶磁の推定個体数を集計した。その合計は、17,150点である。

今回の共同調査の結果、6期に大別される中国の景德鎮窯系と福建・広東系、竜泉窯系の磁器と肥前陶磁の時期別の出土比率そして以下の問題点を把握できた。

I期（14世紀～15世紀中葉）	推定個体数	16点	竜泉 68.8%
II期（15世紀後半～16世紀中葉）	同	177点	景德鎮 94.9%
III期（16世紀後半～17世紀前半）	同	1,221点	福建・広東 53.6%
IV期（17世紀後半～18世紀初）	同	2,575点	景德鎮 59.5%
V期（17世紀末～18世紀）	同	11,895点	景德鎮 52.9%
VI期（18世紀後半～19世紀前半）	同	1,266点	福建・広東 94.5%

① 膨大な量 陶磁片の出土したスロソワン王宮などの調査面積は、遺跡全体のまだ一部にしか過ぎない。想定される全体量の膨大さは、ここで陶磁貿易の大きさを物語っている。

② バンテン・ラーマ遺跡の成立時期 上記以外に長沙銅官窯水注片を1点確認した。そのため、この遺跡の成立は9世紀まで遡る可能性がある。これはI・II期も含めて、13km内陸のバンテン・ギラン遺跡の存続期間と一致している。

③ 本格的な陶磁貿易の開始 III期は、1590年代以降が中心である。福建からバンテンへ毎年4艘の商船渡航が許可された1589年と、それは直接関係があり、1570年代のバンテンの西部ジャワ統一とも結びつく。

④ 肥前陶磁の輸出 今回の調査で確実になった1640年代のバンテンへの輸出は、オランダの手によらない可能性が極めて高い。考古資料として日本以外で初めて確認された古九谷様式色絵の存在からも、中国人によってなされたことを推測させる。1660～82年に限定されるティルタヤサ離宮遺跡試掘調査の出土陶磁は、肥前が主である。オランダと対決したバンテン王国最盛期のこの期間では、肥前が中国陶磁に代わった状況が明瞭である。

⑤ 圧倒的な18世紀の陶磁貿易 オランダがバンテンの自主性を奪って以降のこの時期こそが、陶磁貿易の圧倒的なピークになっていたことが判明した。中国人が中心に交易された福建・広東系の増加率が、絶対量で9倍近くになっている。東南アジアにおいて中国人の果たした役割の大きさが感じられる。

肥前陶磁は考古資料としての日本の文化所産の中で、例外的に国外で発見される。バンテンでは、肥前陶磁が中国陶磁と競いあって出現している点に、問題が凝縮して

いる。今回の各参加者は、その相互補完的な共同研究の意義を改めて理解した。（本調査は、三菱銀行国際財団による若手研究者交流を目的としたバンテン遺跡研究会への助成でなされた。）

ベトナムにおける歴史資料の状況について——嶋尾 稔（慶應大学）

近年のベトナムにおける1945年以前の歴史資料の公開には目を見張るものがある。具体的には硃本 Chau Ban（阮朝の上奏文などの公式記録）、地簿 Dia Ba（土地税台帳）、社誌 Xa Chi（村の地誌）、家譜 Gia Pha（族の記録）、郷約 Huong Uoc・俗例 Tuc Le（村法）、神勅 Than Sac（村の守護神への勅）、神跡 Than Tich（神の事跡）、囑書 Chuc Thu（相続文書）、不動産売買文書、各種の碑文などが大量に我々外国人研究者にも利用可能になった。以上は漢文、チューノム、クオックグー（ベトナム語の声調符号付きローマ字）で書かれた資料であるが、仏領期に関してはベトナムに残るフランス植民地政権側の地方毎・行政機関毎のフランス文書もある程度見られるようになった。さらに文献調査だけでなくフィールド調査も可能になっている。

これらの資料の状況については、日本では昨年1月に開かれた日本ベトナム研究者会議の総会で紹介されており（硃本については坪井善明氏、地簿については桜井由躬雄氏、日本軍政期に関するフィールド調査について古田元夫氏、郷約について嶋尾稔が報告）、本学会の関東例会において昨年4月に桜井由躬雄氏が社誌を中心に報告している。若手ベトナム研究者合宿に於いても八尾隆生氏が前近代史料の所蔵機関について報告している。また、桃木至朗氏を中心とするグループによって地簿に関する調査（科研）が進行中である。現在、留学中の何人かの研究者もそれぞれの問題に即してこれらの資料の調査研究に従事している。今後、これらの資料を活用した研究の成果が現れるのも時間の問題であろう。

ここでは、上記の資料の所在について所蔵機関別に紹介したい。以下の記述は、基本的に1993年夏および1994年1月の調査で得た情報に基づいている。

まず、前近代の歴史資料の収集整理においてもっとも精力的に活動しているのが、漢文チューノム院 Vien Nghien Cuu Han Nom（ハノイ）である。名前の示す通り、漢文とチューノムの資料が中心であるが、近年立て続けに目録を出版し、利用の便に供している（Vien Nghien Cuu Han Nom va Vien Vien Dong Bac Co Phap, Di San Han Nom Viet Nam - Thu Muc De Yeu, tap 1-3, Nha Xuat Ban Khoa Hoc Xa Hoi, Ha Noi, 1993. Van Khac Han Nom Viet Nam, Nha Xuat Ban Khoa Hoc Xa Hoi, Ha Noi, 1993.）。数年前まではガリ版刷り目録を見せてもらうのも一苦労だったことを考えると隔世の感がある。ここには、地簿、俗例、社誌、家譜、神勅、碑文拓本などが大量に所蔵されている。地簿、俗例（645冊）、社誌（クオックグー）は、それぞれ独自のコレクションをなしており、これらは出版された目録には載せられていないので、直接カードボックスを検索しなければならない。各コレクションとも仏領期の省別に

いる。今回の各参加者は、その相互補完的な共同研究の意義を改めて理解した。（本調査は、三菱銀行国際財団による若手研究者交流を目的としたバンテン遺跡研究会への助成でなされた。）

ベトナムにおける歴史資料の状況について——嶋尾 稔（慶應大学）

近年のベトナムにおける1945年以前の歴史資料の公開には目を見張るものがある。具体的には硃本 Chau Ban（阮朝の上奏文などの公式記録）、地簿 Dia Ba（土地税台帳）、社誌 Xa Chi（村の地誌）、家譜 Gia Pha（族の記録）、郷約 Huong Uoc・俗例 Tuc Le（村法）、神勅 Than Sac（村の守護神への勅）、神跡 Than Tich（神の事跡）、囑書 Chuc Thu（相続文書）、不動産売買文書、各種の碑文などが大量に我々外国人研究者にも利用可能になった。以上は漢文、チューノム、クオックグー（ベトナム語の声調符号付きローマ字）で書かれた資料であるが、仏領期に関してはベトナムに残るフランス植民地政権側の地方毎・行政機関毎のフランス文書もある程度見られるようになった。さらに文献調査だけでなくフィールド調査も可能になっている。

これらの資料の状況については、日本では昨年1月に開かれた日本ベトナム研究者会議の総会で紹介されており（硃本については坪井善明氏、地簿については桜井由躬雄氏、日本軍政期に関するフィールド調査について古田元夫氏、郷約について嶋尾稔が報告）、本学会の関東例会において昨年4月に桜井由躬雄氏が社誌を中心に報告している。若手ベトナム研究者合宿に於いても八尾隆生氏が前近代史料の所蔵機関について報告している。また、桃木至朗氏を中心とするグループによって地簿に関する調査（科研）が進行中である。現在、留学中の何人かの研究者もそれぞれの問題に即してこれらの資料の調査研究に従事している。今後、これらの資料を活用した研究の成果が現れるのも時間の問題であろう。

ここでは、上記の資料の所在について所蔵機関別に紹介したい。以下の記述は、基本的に1993年夏および1994年1月の調査で得た情報に基づいている。

まず、前近代の歴史資料の収集整理においてもっとも精力的に活動しているのが、漢文チューノム院 Vien Nghien Cuu Han Nom（ハノイ）である。名前の示す通り、漢文とチューノムの資料が中心であるが、近年立て続けに目録を出版し、利用の便に供している（Vien Nghien Cuu Han Nom va Vien Vien Dong Bac Co Phap, Di San Han Nom Viet Nam - Thu Muc De Yeu, tap 1-3, Nha Xuat Ban Khoa Hoc Xa Hoi, Ha Noi, 1993. Van Khac Han Nom Viet Nam, Nha Xuat Ban Khoa Hoc Xa Hoi, Ha Noi, 1993.）。数年前まではガリ版刷り目録を見せてもらうのも一苦労だったことを考えると隔世の感がある。ここには、地簿、俗例、社誌、家譜、神勅、碑文拓本などが大量に所蔵されている。地簿、俗例（645冊）、社誌（クオックグー）は、それぞれ独自のコレクションをなしており、これらは出版された目録には載せられていないので、直接カードボックスを検索しなければならない。各コレクションとも仏領期の省別に

整理されている。

極東学院図書館の後身である社会科学通信院 Vien Thong Tin Khoa Hoc Xa Hoi 図書館（ハノイ）にも、村落関係の歴史資料が相当数蔵されている。極東学院の旧蔵書の内、漢文とチューノムのものは原則として、漢文チューノム院に移されたが、社会科学通信院がいまだに保管しているものもあり、その中には漢文郷約のコレクション 1200冊余が含まれている。これについては現在目録を作成中とのことである。クオックグーで書かれた村落資料では、郷約と神跡が注目に値する。クオックグー郷約（5000冊余）については、既に目録が作られている（*Vien Thong Tin Khoa Hoc Xa Hoi, Thu Muc Huong Uoc Viet Nam Thoi Can Dai, Ha Noi, 1991.*）。神跡については、北部各省村落のものが6000村分ほど集められており、中には漢文を添付したものもある。これはまだ未整理のようである。

国家文書館第一局 Trung Tam Luu Tru Quoc Gia 1（ハノイ）には、600余の硃本が保管されている。硃本は1975年以降1991年までホーチミン市の国家文書館第二局に置かれていたのだが、1991年にハノイ側がいささか強引にハノイに移したものである。1万点を越えるベトナム全土の地簿も国家文書館第一局の管理下に置かれている。これも本来ホーチミン市にあったのをハノイに移したものである。また、仏領期のフランス語文書も大量であり、省別に整理したカードボックスもある。

国家文書館第二局 Trung Tam Luu Tru Quoc Gia 2 は、フエ以南の文書を収集している。漢文、チューノム、フランス語、英語、ベトナム語で書かれた前近代から現代までの各種資料を管理している。並べると12キロに及ぶという膨大な資料を蔵しているが、未整理の部分が圧倒的に多い。地簿と仏領期の資料に関するタイプ版の目録、および仏領期の資料に関するカードボックスが存在するが、一部分しか見ていないのでどの程度使えるものか不明である。フランス語資料については、現在コンピューターに入力して検索できるように作業中であるが、資料の膨大さに比べて労働力があまりに少なく、いつ終わるものかわからない。閲覧室には、閲覧できる資料のカードボックスとそれをコピー製本した目録が置かれている。

このほか、ハノイの国家図書館 Thu Vien Quoc Gia、史学院 Vien Su Hoc 図書館、ハノイ国家大学史学科図書館にも各種の歴史資料が蔵されている。

最後に、私が関心を持っている郷約資料について気の付いたことに触れておきたい。郷約のテクストには、これまでの調査で私の知りえた限りでも次の 5 種類がある。第一は正本である。これは本来、各村の亭 dinh に保管されていたもので、現在でも民間に残っているようである。現地調査を通じて発掘されているが、基本的に個人の研究者が蔵しているようである。字義通りの地方（じかた）文書はこの範疇のもののみである。この範疇の資料は私もまだほとんど見ていないので、どの程度残っているものか、保存状態はどうかなどの状況については不明である。第二は、仏領期の里長 Ly Truong（および先紙 Tien Chi）の承認印の押された正本からの正規の抄本である。漢文チューノム研究所の俗例コレクションはすべてこの範疇に属する。これは AF の図書記号が付されている。この抄本は、保存状態も良く字も概ね読みやすい。

1910年にクロブコフスキー総督の時にトンキンの慣習調査の命令が出され、それが極東学院の紀要の短報欄に載せられているので、この当局の命によって里長が提出したものではないかと思われる。筆写の年次は維新年間（1907—1916）が多いようであるが、筆写された正本の編纂年は18世紀から20世紀初等までまちまちである。漢文チューノム院が独自に収集した VHv 記号の資料の中にもこの範疇の郷約が含まれている。第三は、里長の承認印のない抄本である漢文チューノム院の A 記号（極東学院収集資料）と VHv 記号の資料の中に含まれている。当局の命とは別に独自に作られたものであろう。以上が、現在ベトナムで収集整理されている郷約であるが、このほかに次のような郷約があるので、ベトナムの図書館の歴史資料を利用するときに頭に入れておく必要があろう。第四の範疇の郷約は、上の三種の郷約が村毎の資料であるのと異なり、省毎に作られた郷約報告集と呼ぶべきもので、パリ・アジア協会のランド・コレクションに含まれている。この種類の郷約にはベトナムではまだお目にかかるっていない。（この資料については山本達郎先生よりそのマイクロフィルムを見せていただいた。記して心より謝意を表したい。山本先生はこの資料について夙に社会経済史学会で報告されている。）第五は、仏領期に知識人が作成し刊行した改良郷約である。これは当時の雑誌で見ることができる。なお、社会科学通信院が所蔵する大量の郷約については未見であるが、旧極東学院収集のコレクションということであるので、おそらくは第二の範疇に属するものであろう。ただ、クオックグー郷約の目録を見る限りでは1920年代後半以降のものが中心であり、30年代に再び調査収集が行われたものと思われる。社会科学通信院の漢文郷約については情報が不足しており、今のところ何とも言えない。

以上、歴史資料の所在を中心に記してきたが、実際にその資料が閲覧可能か否かは、ケースバイケースで一概に言えないことを念のため申し添えておく。今後ベトナムへ資料調査に行かれる方はこの点あらかじめ確認しておいたほうがよい。

地区例会・研究会活動状況

中国・四国地区 ————— 植村 泰夫

S E A F 研究会

1993年11月20日（於広大文学部）

赤崎 雄一（広大大学院）「20世紀前半ジャワの農民反乱と村落社会」

1993年12月18日（於広大文学部）

土井 理子（広大大学院）「ゴルカルとインドネシア政党政治」

関西地区 ————— 早瀬 晋三・青山 亨

1993年11月から1994年3月までの関西例会は以下のように開催された。この間の出席者数は毎回20人前後である。なお、2月から会場がこれまでの摂南大学にかわって

1910年にクロブコフスキイ総督の時にトンキンの慣習調査の命令が出され、それが極東学院の紀要の短報欄に載せられているので、この当局の命によって里長が提出したものではないかと思われる。筆写の年次は維新年間（1907—1916）が多いようであるが、筆写された正本の編纂年は18世紀から20世紀初等までまちまちである。漢文チューノム院が独自に収集した VHv 記号の資料の中にもこの範疇の郷約が含まれている。第三は、里長の承認印のない抄本である漢文チューノム院の A 記号（極東学院収集資料）と VHv 記号の資料の中に含まれている。当局の命とは別に独自に作られたものであろう。以上が、現在ベトナムで収集整理されている郷約であるが、このほかに次のような郷約があるので、ベトナムの図書館の歴史資料を利用するときに頭に入れておく必要があろう。第四の範疇の郷約は、上の三種の郷約が村毎の資料であるのと異なり、省毎に作られた郷約報告集と呼ぶべきもので、パリ・アジア協会のランド・コレクションに含まれている。この種類の郷約にはベトナムではまだお目にかかるっていない。（この資料については山本達郎先生よりそのマイクロフィルムを見せていただいた。記して心より謝意を表したい。山本先生はこの資料について夙に社会経済史学会で報告されている。）第五は、仏領期に知識人が作成し刊行した改良郷約である。これは当時の雑誌で見ることができる。なお、社会科学通信院が所蔵する大量の郷約については未見であるが、旧極東学院収集のコレクションということであるので、おそらくは第二の範疇に属するものであろう。ただ、クオックグー郷約の目録を見る限りでは1920年代後半以降のものが中心であり、30年代に再び調査収集が行われたものと思われる。社会科学通信院の漢文郷約については情報が不足しており、今のところ何とも言えない。

以上、歴史資料の所在を中心に記してきたが、実際にその資料が閲覧可能か否かは、ケースバイケースで一概に言えないことを念のため申し添えておく。今後ベトナムへ資料調査に行かれる方はこの点あらかじめ確認しておいたほうがよい。

地区例会・研究会活動状況

中国・四国地区 ————— 植村 泰夫

S E A F 研究会

1993年11月20日（於広大文学部）

赤崎 雄一（広大大学院）「20世紀前半ジャワの農民反乱と村落社会」

1993年12月18日（於広大文学部）

土井 理子（広大大学院）「ゴルカルとインドネシア政党政治」

関西地区 ————— 早瀬 晋三・青山 亨

1993年11月から1994年3月までの関西例会は以下のように開催された。この間の出席者数は毎回20人前後である。なお、2月から会場がこれまでの摂南大学にかわって

大阪市立大学に移り、それにともない開催時間も午後2:30～5:30から1:30～4:30にくりあがっている。

- 11月20日 遠藤 正之（上智大学・院）「10～13世紀（宋代）チャンパ史再考」
12月18日 貞好 康志（京都大学・院）「華人がインドネシア・ナショナリズムを志向した時」
1月22日 野津 初美（大阪外大・卒）「タイ語動詞二語連用文における考察」
2月12日 吉川 利治（大阪外大）「泰緬鉄道建設のアジア人労務者と連合軍捕虜」
3月19日 根布 厚子（京都大学・院）「靈媒再考：シンガポールの事例」
また、10月には第200回の大台を迎えることになり、記念シンポジウムを計画している。多くの方々のご参加をお願いするしだいである。

中部地区 ————— 馬場 雄司

中部地区では、南山大学の援助を受け、当大学を会場にして研究会を開催している。活動は、1993年度までは、毎月第3ないし第4土曜日に行っていたが、1994年度より、原則として、毎月第2土曜日に行おうと考えている。従来、出席者がやや減少傾向にあったのは、同地区の様々な研究会や、他地区の例会と日程が重なったことが大きな原因であった。今後は発表者の開拓を行いつつ、また諸研究会との日程の調整を考えながら、内容の充実を計っていきたい。1993年11月以降の活動は、以下の通り。

- 11月27日 足立 文彦（名古屋大学経済学部）「日本の中小企業とアジア」
12月18日 滝 リンダ（中部フィリピン友好協会会長）「フィリピン人からみた日本」
1月22日 Heng Pek Koon（テンプル大学東京校）「Chinese Politics in Malaysia Today: Historical Rastrospective」
2月18日 倉沢 愛子（名古屋大学大学院国際開発研究科）「二つの祖国を生きた人達—戦後日本・インドネシア関係の一側面」
3月9日 竹島 良成（名古屋大学大学院文学研究科）「日本占領期のビルマに関する一考察」

関東地区 ————— 桜井 由躬雄・嶋尾 稔

昨年11月から3月までの関東例会は、12月と3月を従来通り休みとし、さらに2月も都合により開催できなかったため、下記の2回のみであった。従来通り東京大学山上会館会議室で開催し、参加者は20名前後である。

- 11月27日 浅見 靖仁 「プッタタートの思想とタイ中間層の文化」
1月29日 奈良 修一 「17世紀ヴェトナムの生糸輸出について」
4月以降の例会も引き続き、東京大学山上会館会議室で毎月最終土曜日に開催する予定である。

事務局からのお願い

『会報』の内容充実のため、資料・研究短報欄へご寄稿下さい

新資料に関する情報、探究資料の公開検索、内外での研究集会に関する情報や紹介（ただし、本学会の組織とは直接関係なく、かつ恒常に運営されている研究会の年次報告に類するものはご遠慮下さい）、特定分野にかかわる内外の新しい研究動向などをお寄せ下さい。

*字数：二千字程度を目処にしてください。

*締切：毎年2月末と8月末（それぞれ5月初、11月初発行の『会報』に掲載）

*宛先：事務局

*手書きでも結構ですが、できればワープロでお願いします。ワープロの場合、フロッピーディスクを添えて下さい。

住所変更などにつきましては、書面にてすみやかに事務局宛て一報下さい

「転居先不明」は会誌『東南アジア歴史と文化』『会報』その他各種の送付に支障をきたすことになります。ご面倒ながら、転居、転勤などの通知先に、本学会事務局も加えていただきますよう、お願い申し上げます。

東南アジア史学会会報 第60号

1994年5月 発行

発行者 東南アジア史学会（会長 吉川利治）

住 所 〒562 大阪府箕面市粟生間谷東8-1-1

大阪外国语大学 八尾隆生研究室 気付

電 話 0727-28-3111 内線736

FAX. 0727-28-3557

郵便振替 00930-4-21342 (東南アジア史学会)
